

劇団フライングステージ第39回公演

# PRESENT プレゼント

関根信一

林田太陽 (32歳・フリーター)  
坂井真人 (34歳・公務員)  
久保田充 (33歳・ブリーダー)  
林田敦子 (58歳・太陽の母)  
望月裕二 (26歳・学生)  
内田仁美 (34歳・ボランティア)  
泉 謙吾 (32歳・フリーター)

2014年の東京。  
初夏から冬にかけて。  
舞台にはソファが一つ、その前に低いテーブル。

\* \* \* \* \*

2014年6月の土曜日。  
林田太陽と坂井真人が住む、2LDKのリビング。  
座り心地の良さそうなソファとテーブルのセット。  
下手に玄関に通じるドア。  
上手側には2人の部屋。  
今日は土曜日。とってもいい天気なのどかな昼すぎ。  
真人が下手から登場。  
鼻歌を歌いながら、2人分の朝食のしたくをしている。  
どうやら、下手のキッチンで料理をしていたらしい。  
2人分のパンケーキ。コーヒーポットにも2人分のコーヒー。  
幸せそうな朝食の風景。  
太陽が登場。パジャマ姿。

真人 おう。  
太陽 おはよう。うわ、何、もうこんな時間。

真人 コーヒー？  
太陽 うん。  
真人 パンケーキ焼いたから。  
太陽 へえ。ホットケーキ？  
真人 パンケーキ！  
太陽 どう違うの？  
真人 さめないうちに食べちゃってよ。いただきます。

勝手に食べ始める。

太陽 怒ってる？  
真人 ホットケーキ？  
太陽 じゃなくて。  
真人 何？  
太陽 怒ってるんだ。  
真人 怒るって何に？ 起こさなかったこと？ だって、聞いてないよ。何も。  
太陽 そうじゃないけど……あのさ、ちよつと話があるんだけど……。  
真人 いいから食べちゃってよ。せつかくつくつたんだから。話はそのあと。

太陽、食べ始めるが、すぐにやめてしまう。

真人は、iPhoneを見ている。

真人 日本代表、4対3でザンビアに逆転勝ち。ザンビアってどこだっけ？  
太陽 ねえ、今日忙しい？  
真人 うん……  
太陽 どっか行くの？  
真人 うーん……  
太陽 (強く) どっちよ！  
真人 話しかけないでよ。ほらこぼした。  
太陽 コーヒーいれようか？  
真人 いらない。  
太陽 ね、聞いて！  
真人 何よ。

間

真人 今日仕事なんじゃないの？  
太陽 今日は休み。

真人 だいじよぶなの？ 全然働いてないじゃない。  
太陽 行つたつて、仕事ないんだもん。休んでいいつて。

真人 じゃあ、他の仕事探しなよ。何だ、その話？

太陽 違うつて。ゆうべ……

真人 別にいいつて、気にしてないつて。

太陽 すつごいひさしぶりだったのに。

真人 いいよ、ひさしぶりだったんだから。

太陽 そうだよね、やり方忘れちゃうくらい。

真人 ……

太陽 ごめん。実は、あのあと、ずっと眠れなくなっちゃつて……

真人 知ってる。起きて、DVD見てた。「半沢直樹」。

太陽 何、知つてたの？ じゃあ、一緒に見ればよかつたのに。

真人 もう見たし。片岡愛之助、いいかんじ。堺雅人今いち。

太陽 何で言うかな。そういうこと。

真人 何よ、もう見たんじゃないの？

太陽 見てないよ。

真人 じゃあ、何してたの？

太陽 知らないよ。

真人 何、怒つてんだよ？

太陽 怒つてないつて。

真人 話つて何？

太陽 だから……、もう、いいよ。

真人 よくないつて。話あるつて言つたじゃない？ 話しなよ。

太陽 もういいよ、そういう気分じゃなくなつた。

真人 気分でやめてもいい話？

太陽 まあね。

真人 じゃあ、いいや。ごちそうさま。それ、食べたらかたしてね。

さつさと自分の分をかたづけ始める。

太陽 何、急いでるの？

真人 別に。

太陽 やめてくれるかな、その「別に」つていうの。

真人 何で？

太陽 嫌いなもの。知ってるでしょ。

真人 嫌いなものは知ってるけど、何で？

太陽 その「何で？」つていうのもやめてほしい。

真人 え？ じゃあ、しゃべれないよ。

太陽 じゃあ、しゃべるな！  
真人 ……。

真人、キッチンに消える。

太陽 ねえ、どこのうちもこんなかな？  
真人 ……。

太陽 遅く起きた土曜の昼過ぎって。

真人（声） さあね。

真人、あわてて顔を出して。

真人 「さあね」も禁止？

太陽 いいよ、それは。

真人 何なの、話って？

太陽 ……ゆうべはごめん。

真人 さつき、聞いた。

太陽 ごめんね。

真人 いいって。

真人、太陽のとなりに座る。

真人 どっか行く？

太陽 これから？

真人 うん。

太陽 映画？

真人 「アナと雪の女王」とか。

太陽 うーん。

真人 「X MEN」の新しいやつは？

太陽 ヒュー・ジャックマン？ そうだなあ。

真人 映画じゃなくてもいいや。どっか行こう。いい天気だし。

太陽 そうだね。うん、そうしよう。

と玄関のチャイムの音。

真人 誰、こんな時間に？

太陽 宅急便じゃない。アマゾンの配達。ヤマトのお兄さん、けっこうイケてるよ。男くさくて。

真人 パスパス、汗くさすぎ。  
太陽 汗くさいの好きだつて言つてたじゃん。

真人、無視して玄関へ。

久保田充が登場。つづいて真人。

充 ハロー！

太陽 あれ、みつちゃん。何の用？

充 何よ、その言い方。用がなくつちや来ちゃいけないの？

真人 普通は来ないよ。用もないのに。しかもアポなしで。

充 だつて、思いついちやったのよ。近所まで来たし。誰もいなかったら、帰ろうと思つたの、やだ、あんたまだ寝てたの。ヤル気ないわね。

太陽 みつちゃん、来るつてわかつてたら、豪華にドレスアップしてました。

充 あら、そう。アタシもコーヒーもらおうかな？

真人 カフェじゃないんですけど。

充 ついででしょ。じゃ、いいわよ、アタシやるから。

真人 いいから、座つてて。

真人、コーヒーの支度にキッチンへ消える。

充 相変わらず片づいてるわね、何て言うか、イライラするわ。

太陽 やめてよ、また、ちらかして帰るの。

充 どうしてこんなに生活感のないところに住めるわけ？

太陽 こういう好きだから。

充 アタシはだめ。なんていうか、エコロジカルな女だから、ガーデニングとか、ペットとか。そういう生き物の気配がないと、絶対にだめ。

太陽 元氣、チビちゃんたち？

充 みんな巢立つていったわ。無事に。一匹、ちよつと大きくなりすぎたのがいたんだけど、そのへんは適当に。ちよちよちよいと。

太陽 トイブードルつて大ききの規格きびしいんじゃないの？ そんないいかげんなことしてるとブリーダーの免許、取り上げられちゃうよ？

充 みんなやつてんだから。あ、そうだ。あんたんとこに一匹いくつて話、どうなったんだっけ？

太陽 イヌはよそうつて。なんだかいやな思い出があるらしくつて。

充 いやな思い出つて何？

太陽 まだ聞いたことない。子供の頃らしいんだけど。

充 何よ、つきあつて何年？

太陽 もうじき3年。

充 一緒に住んでて、そんな話も共有してないわけ？  
太陽 だって、話したがないんだもん。  
充 そのぐらい無理やり聞き出すのよ！

真人、登場。

真人 何、無理矢理聞き出すって？

充 あんた？ イヌ嫌いになつたいやな思い出って何？

真人 ……話したくない。

充 何よ、かっこつけて。いいから言いなさい。

真人 かんべんしてよ。

充 いいじゃないよ、さらつと言ったって。

太陽 やめなよ、顔色悪いよ。

充 何なのよ？ それって。すっごい気になるんだけど。

太陽 お願ひ、やめてあげて。

充 わかったわよ。ふん、仲良しね。

充、コーヒーを飲む。

充 そうそう、ちゃんと用事あつてきたんだわアタシ。

太陽 何、思い出してんの？

充 写真、写真、こないだの名古屋、「NLGR」の写真。

真人 わあ、ありがとう。

充 デジカメだけど、あんたたち映ってるの、適当に焼いておいたわよ。

太陽 いいのに、データ送ってくれば。

充 やあなのよ。モニターで写真見るの。写真はやっぱりアルバムに整理するもんでしようよ。

太陽 ふーん。

真人 晴れてよかったよね。

充 ほんと、アタシ、初めて行ったけど、おもしろかったわ。名古屋のゲイバーついていわね、元気があつて、ああいうイベント、みんなでやっちゃうんだもんね。

真人 誠さん、すごい何、この顔？

充 あ、これはね、あんまりすごいから、特別に焼いておきました。あんたたち映ってないけど。

真人 怒られない？

充 いいのよ、内緒なんだから。一緒に旅行するのも久し振りだったしね。二泊三日で名古屋って、言葉にするとかなり地味ーなかんじだけど。それでもね、どこもいかないよりは。

真人 うちもそんなもんだって。  
太陽 うん。

真人 ついでにエイズの検査受けて。

太陽 そうそう。

真人 けっこう意味あつたよね。

充 たしかにそうよね。アタシだつてき、あの人とき合うまで結構おてんばしてたから、それなりに気をつけて、まめに検査受けてただけど、つきあい始めてからはね……

真人 うーん。

充 わざわざ行くのもね……。

真人 そうそう。

充 やっぱりちよつとドキドキするもんなのよ。お互いにだいじょぶだつてことがわかつてても。

真人 でも、それって大事なことだよ。

充 ま、優等生。「お転婆」なんて言葉、辞書にもないような言い方ね。

真人 お転婆つて……

充 どうせ「ハッテン場」なんて言葉もないんでしょ。

真人 それは、まあ……

充 やめて！ 「若い頃はこれでも、けっこう遊んでたんだ」なんて言うようになったら、おしまいよ。年取つたつてこと自分でカミングアウトしてるようなもん。よくいるでしょ、おやじがさ、「俺も、若い頃はヤンチャしたからなあ。あ、このキズ？ ああ、何でもない、何でもない」つて、ほんとに何でもないキズ、訳ありげにしてみせるあれ。

真人 俺はほんとに何もしてないつて。

充 あんたは……いいわ、聞かないでおいてあげる。ていうか、聞くのこわいし。

太陽 やめてよ。そんなんじゃないつて。

充 (突然) あんたたちつて、どのくらいしてる？

真人 してるつて何？

充 何つてアレよ。

太陽 アレつて何？

充 馬鹿じゃないのあんたたち？ アレは「ザット」よ。

### 短い間

真人 もう、帰ってきてくれる？

充 ごめんなさい、そうじゃなくて、エッチ。

### 短い間

充 どのくらい？ うちき、もう全然つかんじなの。まあ、たしかに淡泊なのかもしれない。そう思って、あきらめようとしたわ。でも、この頃ひどいの。だって、一緒に寝るのもイヤだって言うのよ。そんなのってあり？

太陽 まあ、だんだん暑くなってきたしね……

真人 たしかに二人一緒に暑苦しいよね。

充 冷房は入れています！ そういうのって、倦怠期っていうの？ そういうんじゃないかって、いつまでもいちやいちゃ愛しあえる関係でいたってそう思ってたのよ。なのに、もう……。だから、どうなの、あんたたちは？

太陽 うち……？

充 一緒に寝てる？

真人 まだ、昼間なんですけど？

充 昼でも夜でもシンプルな質問よ？ どうなの？

太陽 寝てるよ。

真人 うん。

充 ……あ、そう。エッチは？

真人 まだ二時前なんだけどなあ。

充 どうなの？

太陽 適当に……

充 適当に、何？ 適当にやってるの、やってないの？

真人 やってるよ。だって、一緒に寝てるし……

太陽 ……

充 そうなんだ。(気づいて) あ、そうなんだ、こんな時間までパジャマでいるってことで察するべきだったわね。帰るわ。

真人 何よ。もう、いいわけ？

充 結構です、これ以上は、ノロケ話になりそうだから。ごちそうさま。

太陽 ごめんね。役に立てなくて。

充 やめて、謝るの。もう、絶対に、あんたたちセックスストレスになってると思ってたのに……。ああ、お幸せに。じゃあね。

太陽 みっちゃん……

充 お見送りは結構よ。これは流しに置いておきます。ショックだわ。

大げさに嘆きながら退場。  
ドアの閉まる音。

真人 なんだ、あれ？

太陽 嘘ついた。

真人 セックスレス？



太陽 そう。  
真人 してるって。  
太陽 そうかな……？  
太陽 そうだよ。

二人並んで座っている。

真人 みっちゃんも帰ったし、じゃ、してみるか？

太陽 ……

真人 なんつって。

太陽 ……

真人 やっぱ、やめとく？

太陽 どうしようかな？

真人 じゃ……

二人、抱き合おうとする。

玄関のチャイム。

真人 なんだよ、もう！！（怒っている）

しつこく鳴る玄関チャイム。

真人 宅急便じゃないね。

太陽 いやな予感がする。

真人 行ってくる。

太陽 よろしく。

真人、玄関に退場。

その間もチャイムは鳴りまくり、リズムをきざんでいたりする。

真人（声） はい、はい！！

間

真人より先に、太陽の母、林田敦子がやってくる。大荷物をかかえている。

敦子 居留守使おうとしたでしょ？ わかってるんだから。はい、これ、おみやげ。すぐ

冷蔵庫に入れて。大トロだから、大トロ。それと、マンガスチン。冷凍だから。早くね！

太陽 もういいよ。そんなに買ってこなくて。

敦子 だって、うちに持ってったって、食べるの私一人だし。大トロよ。大トロ。すつごいの。ちゃんと味見したんだけど、これがおいしいのよ。ちよつと食べてみる。

太陽 やめてよ、食事したばかり。

真人 コーヒー入れます。

敦子 あ、その中にね、ハーブティーが入ってるから、飲んでみない？ ルイボステイとかマテ茶とか。ティーバッグになってるから、一つずつの。デトックス効果があるんですって、デトックス。

真人 あ、わかりました。

敦子 あんたも飲むわね？

太陽 いいよ。

敦子 じゃ、二つ。(少し、考えて) やっぱり、三つ。

真人 ……。

敦子 アタシやろうか？

真人 あ、いいです。座っててください。

真人、大急ぎでキッチンに退場。

太陽 何の用よ？

敦子 何よ、その言い方。全然、電話もよこさないし。

太陽 メールしてるじゃない。

敦子 読めないのよ。やっぱりiPhoneじゃなくて、前の携帯の方がいい。ねえ、大トロあげるから、iPhoneの使い方もう一度教えて。

太陽 さつき、くれたんじゃないの？

敦子 いいのよ、持って帰っても。

太陽 わかったよ。iPhoneは？

敦子 ……あ、おいてきた。

太陽 じゃあ、何しに来たの？

敦子 決まってるでしょ、差し入れよ。親心よ。でも、ピンポイントして誰もいなかったら帰ろうと思ってたんだけど。太陽にちよつと話があつて……

太陽 話？ まさか再婚とか？

真人、ちよつと入ってきて。

真人 再婚？ おめでとうございます。

敦子 違うわよ。そうじゃなくて、もつと微妙な話。

太陽 ……。

真人 あの、席はずしてましようか？

敦子 いいわ、坂井くんもいてちょうだい。いてほしいの。  
太陽 何なのよ、話って？

敦子 えーとね……ちよつと、あんた何、こんな時間までそんなかつこうで……

太陽 着替えた方がいいなら着替えるけど。

敦子 あ、いいいい、そのまま。えーと……

太陽 なに？

敦子 あんたたち、結婚したりしないの？

太陽・真人 は？

敦子 ほら、もう認められてるんでしょ？ アメリカとかヨーロッパとかじゃ。もう付き合って永いんだし、そういう話したりしないの？

太陽 え？

太陽と真人、顔を見合わせる。

太陽 それは外国の話だから。日本じゃまだ認められてないから。

敦子 でも、ネットで見たわよ。結婚式のニュース。

真人 それは式はあげたけど、法的には養子縁組だったりするわけで。

敦子 あんたたちはどうなの？ どうするの？

太陽 そんなこと言いに来たの？

敦子 そんなことって何よ？ 大事な話でしょうよ。

太陽 今はまだ考えてないから。ね？

真人 うん。

敦子 まさかうまくいってないんじゃないでしょうね？ ねえ、坂井くん、どうなの？  
迷惑かけたりしてない？

真人 ええ、別に。

太陽 ……

真人 うまくいってる方だと思いますけど。

太陽 うん。

敦子 そう、よかった。あのね、月曜から入院するの。

太陽 え？

真人 入院、聞こえなかった？

太陽 それはわかったけど。話ってそれ？

敦子 こないだね。検査受けたのよ。ちよつと調子が悪いんで、更年期かしらと思つて、西沢先生ところで。そしたらね、大きな病院紹介するからつて言われて……でね、調べてもらつたら、子宮筋腫なんだつて。でね、とっちゃいましょうつて。

太陽 とつちやうつて何？

敦子 子宮よ。卵巣も取つちやうと大変なんだけどね、更年期がひどくなつたりして。これから使う予定もないし、ま、いいかつて。(真人に) ごめんなさいね。

真人 いえ。だいじょぶなんですか？

敦子 うん、だいじょぶ、だいじょぶ。一人でやっちゃってもよかつただけどき、一応、報告と思つて。

太陽 お兄ちゃんは？

敦子 さつき電話したわよ。ひろみちゃんよこそうかつていうから、いいわよ来なくつて。あんたもいいからね、来なくて。

太陽 一人で平気なの？

敦子 平気よ。黙つてて水くさいとか言われるのやだから、言いに来ただけなんだから。そんな深刻にならないでよ。

太陽 だいじょぶなの、カラダ。

敦子 だから、手術するんでしようよ。

太陽 そんな他人事みたいに……。

敦子 あんたの真似してんのよ。思い出したの。あんたがゲイだつてカミングアウトしたときみたいに。仕返しよ。

真人 何なの、それ？

敦子 (真人に) 聞いてない？ 高校二年のときよね。朝、遅刻しそうになって、それでも、トースト食べながら、行つてきまーす。つて、出てつて。そしたら、すぐに戻つてきて、何か忘れ物なのかなと思つたら、「僕ね、ゲイなんだ」つて。で、行つてきまーす！つて、また出てつちやつて。

真人 そうだつたんだ。

敦子 びつくりしたわよ、お父さんと二人。今でも思うのよ。あんたがあんなこと言わなかつたら、お父さんまだ生きてたかもしれないつて。

太陽 やめて、そういうブラッくな冗談。

敦子 でもね、わかつたのよ。そりゃ、あのあと、ちよつともめたけど、さらつて言つちやつた方が結局はいいんだつて。だから。

太陽 だから……？

敦子 あつさり、言つてみました。以上、じゃあね。おじやまさま。

敦子、立ち上がる。

太陽 入院つてどのくらい？

敦子 十日から二週間だつて。

太陽 お見舞い行くから。

敦子 いいわよ、来なくて。

真人 でも……

敦子 すぐ退院なんだから。じゃあね。(真人に) ほんと、一緒に住んでてくれるつてだけで大助かり。このマンション、資産価値が上がるのあてにして買ったんだけど、もうね……。坂井くん、きれいにしといてくれるし。

真人 マンションの値段またあがってきてるみたいですよ。

敦子 アベノミクス？ どうかしらね？

真人 じゃ、あの、お大事に。

敦子 ありがとう。

太陽 ……気をつけてね。

敦子 うん。じゃ。

敦子、退場。真人も見送りに。太陽、部屋に一人いる。

しばらくして、真人、もどってくる。

真人 病院聞いておいたから、一緒に行こう。

太陽 いいよ、来ないでいいって言ってるんだし。

真人 だったら、わざわざ言いに来ないって。

太陽 ほんと他人ごとみたいに。

真人 太陽の真似だつて言つてたじゃん。

太陽 あのとときはそうするしかなかったんだつて。それが一番いいって思ったの。

真人 よかったじゃん、それでうまく行つたんだつたら。

太陽 行つてないって。その日の夜、もう大変だった。結局、つき合つてた相手のことま

で話すことになつて。向こうの親までまきこんでもう……。

真人 へえ……

太陽 父親は最後まで、認めてくれなかったしね。母親があんなになつたのも、父親死んでから。アニキが結婚して、孫ができて、ようやくつかんじだもん。

真人 でも、今ではよかつたつて思つてるみたいじゃない。

太陽 ねえ、親に話したのつていつ？

真人 話してないよ。話す必要ないし。

太陽 じゃ、一緒に住んでることは、どう説明してんの？

真人 友達だつて。

太陽 納得してる？

真人 田舎だからさ、東京は家賃が高いんでみんなそうしてるんだつて言つたら、信じてる。

太陽 嘘つき。

真人 まあね。それにくらべたら、敦子さんは幸せなのかもしれないよね。

太陽 「敦子さん」なんて呼ばせてるし。

真人 じゃ、行こうか？

太陽 行くつて？

真人 映画。

太陽 そういふ話になつてたんだつて？

真人 早く着替えな。何を見るかは、あとで決めればいいし。

太陽 うん。

太陽、着替えに奥の部屋に消える。真人は、片づけをはじめると、太陽が顔を出して、

太陽 あのさ。

真人 何？

太陽 こないだの検査、僕、HIVポジティブだった。

真人 ？

太陽 じゃ、着替えるね。

太陽、引っこむ。

真人 ちょっと待った。今、何て言った？

太陽 着替えてるんだけど。

真人 いいから！

太陽、部屋から出てくる。着替えの途中。

太陽 こないだの検査の結果、陽性だったんだよね。HIVポジティブ。

真人 それって……

太陽 まあ、そういうことなんだ。じゃ！

太陽、また引っこもつとする。

真人 じゃ、じゃない。どういうことだよ？

太陽 だから、そういうことだって。

真人 話ってそれ？ さっきから言ってた。

太陽 そうそう。

真人 何でそんなにへらへらと……

太陽 そんな深刻そうに話すのってあれじゃない？

真人 十分深刻な問題だろうが！

太陽 やめてよ、怒るの。

真人 何で黙ってたんだよ？

太陽 だから、ずっと言わなきゃなって思ってたんだけど。

真人 あのと、だいじょぶって言ったじゃないか？ 名古屋で。検査の翌日、すぐに結果を教えてもらって。みっちちゃんたちと一緒にミソカツ食いながら。嘘ついたのか？

太陽 だから、僕は、ポジティブだったけど、だいじょぶだって、そう思ったんだと思うな。

真人 そんな……

太陽 だって、言えないじゃない。そんな宝くじ売り場でインスタントくじに当たったみたいには……。

真人 ……。

太陽 病院には行つたんだ。どうしていいかわかんなかったから、うちちゃんに相談して。サポートグループのスタッフしてるから。もう一度、検査した方がいいってことになつて、で、やっぱりそうだったってことがわかったの。

真人 ……。

太陽 まだ、症状も何も出てないし、免疫もぜんぜん下がってないし、今まで通り普通に生活しててダイジョブだって。だから、ダイジョブなんだって。

真人 ……それでだったんだ。

太陽 え？

真人 ゆうべ。なんで黙ってたんだよ？！

太陽 なんだか、夜っていうのはよくない気がしてさ。今日は天気もいいし。これから出掛けるぞっていう楽しい気分の方が、ショックが少ないんじゃないかと思つてさ。うちの母親も言つてたじゃない、さらって言っちゃった方が結局はいいんだって。なんだそうじゃんって思つたから……

真人 言つてみたと？

太陽 そういうこと。

真人 そんな簡単な問題じゃないだろ？

太陽 そうなんだよ、たぶん、そうなんだけど、そんなに複雑な問題でもないような気がする。

真人 気がする？

太陽 いくら考えても、言い合ひしても、検査の結果が変わる訳じゃないから。

間

太陽 ごめん。

真人 いいよ、あやまらなくて……。

真人、座つて顔を手でおおっている。

太陽 泣かないでよ。

真人 泣いてないよ。

太陽 泣いてるじゃん。

真人 どうすればいいんだよ。

太陽 どうもしなくていいんだって、今のところは。だから、ダイジョブだって。ね！  
真人 俺がなぐさめられてどうするんだ。  
太陽 うん。

間

太陽 よかった、話せて。

間

太陽 ありがとね、ちゃんと聞いてくれて。

真人 ……

太陽 じゃ、出掛ける。僕は着替えるから顔洗う。

真人 ……

太陽 ねえ、僕も話したんだから、言っちゃいなよ。何で犬が嫌いになったのか。

真人 ……

太陽 さらっと言ってみ。

真人 死んだんだ。俺の腕の中で。

間

太陽 僕は死なないよ。……たぶん。あ、今のところは。あ、なんていうか……

真人 わかってる。

間

太陽 顔洗ったら。

真人 うん。

真人、退場。

太陽 ねえ、やっぱり犬飼ってみない。みっちゃんに頼んでさ、ねえ。

返事はない。ドアが開いて閉まる音。

太陽 ！？

太陽、ソファに座って、正面を向いている。



両手を広げてソファに仰向けに倒れる。

\* \* \* \* \*

前の場面から数日後。都内の病院の廊下。平日の午後。  
太陽が歩いてくる。反対側から、望月裕二。  
すれ違う二人。

裕二 あのこと……

太陽 (立ち止まり振り返る)？

裕二 ごめんなさい。あの前に一度会わなかったかなと思って……

太陽 え？

裕二 西新宿の保険センターで……。先週の木曜日。部屋から出てきて、そのまんま帰ろうとしたから声かけて。「バッグ」って。

太陽 (思い出して) ああ、あのときの？！ その節はどうもありがとうございました。

裕二 そんな……。

太陽 すっごい偶然。……でも、ないか？

裕二 かもね。今日は？

太陽 あちこち病院紹介されたんだけど、やっぱりここかなと思って。今日はね、もう一度検査。それとこれからどうするかって相談。

裕二 あ、そう。

太陽 まあね。でも、なんだか、うれしいな、また会えて。僕、自分以外のポジティブな人に会うのって初めてなんだよね。って、喜ぶことじゃないよね。

裕二 え？ ああ、平気、平気。

太陽 今日は？ 検査？

裕二 え？ まあ、そんなかんじ。

太陽 もう終わったの？

裕二 ううん、これからかな？

太陽 そう。

裕二 ……ごめん、やっぱりちゃんと言っておくことにする。

太陽 え？

裕二 なんだか、誤解してると思うんで。あの、僕、ダイジョブだったんだよね。

間

太陽 なんだ、そうだったんだ。ごめんね、勝手に思いこんじゃって。よかったね。

裕二 うん。

太陽 でも、じゃあ、なんでこんなところにいるわけ？

裕二 風邪ひいたんで、内科に。うち近所なんだ。で、ちよつと……

太陽 ちよつと？

裕二 どんなかな？ と思って見に來ただけなんだけど……。ここ、エイズの治療で有名な病院なんだってね。あの後、いろいろ調べたらわかってき。

太陽 ダイジョブだったのに？

裕二 うん。結構ショックだったんだよね。僕もあの日、結果、聞きに行つて。しばらく一緒に待つてたじゃない？ そしたら、先に呼ばれて。人のことなんだけど、すごいドキドキしながら待つてたら、ずーと出てこなくて、しばらくしてから。ぼーっとして出てきたじゃない。で、バッグ置いたまんま帰ろうとして。呼び止めて、バッグ返してから、そのくらいいっぱいいいいなんだと思つたら、余計におっかなくなっちゃつて。

太陽 ごめんね、無駄にこわがらせて。

裕二 あの頃、ずっと風邪気味で。今もそうなんだけど。感染してすぐ風邪に似た症状があるとかつて言うじゃない？ だから、あときは大丈夫だったけど、やつぱり心配で。今日も見てもらつたら、ただの風邪ですつて。ごめん。少し、はなれるね。

裕二、遠くに離れる。

裕二 このへんでどう？

太陽 いいよ、話しくいから。

裕二 そう？

裕二、戻ってくる。

太陽 心配性なんだ。

裕二 前も同じようなことしてて。朝起きたら、足のここんところにつつごいあざができて、それが何日経つても消えないんだよね。で、すごいこわくなつちやつて。これつて、そういう病気なんじゃないかなつて。エイズじゃなくても、梅毒とかかもつて、心配になつて、病院に行つたら、ただの打ち身ですつて言われて。それでも、心配だったんで、血液検査受けたら、どっちもダイジョブだったんだけど。

太陽 よかつたね。

裕二 うん。あ、ごめん。

太陽 だから、いいつて言つてんじゃん。あやまらなくて。

裕二 でも、検査の結果聞いちゃつたし。ポジティブだつて。

太陽 いいよ、別に。気にしてない。じゃあ。

太陽、歩いて行く。

裕二 あ、ねえ。

太陽（立ち止まって）なに？

裕二 その前にも会ってないかな？

太陽 え？

裕二 ロシア大使館前。今年の2月。ソチオリンピックの最終日。

太陽 何それ？

裕二 ロシアの反同性愛法に抗議する集会。プーチン大統領が同性愛者を弾圧する法律つくって、聖火リレーの沿道でレインボーフラッグ上げただけの人逮捕したりしたじゃない。それに抗議する人たちがロシア大使館の前に集まって。100人くらい。もしかして、そこにいなかった？

太陽 ああ、仕事先が近かったから、前は通ったかもしれない。でも、僕そういうんじゃないから

裕二 そういうんじゃないって何？ ゲイじゃないってこと？ でも、あの日の検査って、同性愛者のための無料検査だったんじゃない。

太陽 そうじゃなくて、そういう運動とかする人。

裕二 でも、いたことはいったんだね。

太陽 人が集まっているのは見てたけど、参加してたわけじゃないから。へえ、あそこいたんだ。

裕二 うん。僕だって初めて行ったんだよ。そしたら、大使館から出て来た職員が何かひどいこと言って歩いて行ってき。ロシア語全然わからないけど、ひどいこと言うてるっていうのはなぜかわかるんだよね。

太陽 ごめん、僕、もう行かないと。風邪お大事に。じゃ！

太陽、歩いて行く。後を追って行く裕二。

\*

\*

\*

\*

\*

夏。前の場面から一ヶ月後。

同じ部屋。週末の夜早い時間。

内田仁美が座っている。

太陽がお茶をもってやってくる。

太陽 ごめんね。わざわざ来てもらっちゃって。

仁美 で、どうなの調子は？

太陽 全然普通。あれから一度病院に行っただけど、変化なしって。ちょっと拍子抜けって  
かんじ。あんまり何も変わらないんで。

仁美 よろこばなきやだめだつて。

太陽 わかつてるつて。さすが、プロ。

仁美 やめてそういう言い方。

太陽 でも、たくさん会うんでしょ、感染してる人に？

仁美 そんなには会わないよ、電話でしゃべる方が多いかな？

太陽 そうやって、いろんな人の相談に乗ってあげてるんだよね。わかる気がする。声聞  
いてるだけで、何だかほつとするもん、うっちゃんと話してると。マサとは大違い。

仁美 話してないんだ？

太陽 話せないんだもん。今日、病院に行つて来てさとか、普通に話そうとすると、微妙

に話そらすかんじ。気持はわからないじゃないけど、いいじゃないね、自分はなん  
ともなかつたんだから。

仁美 そういうわけにはいかないんじゃないの？

太陽 あの後、すぐ自分ももう一度検査受けたんだよ。そんな一週間やそこいらで結果変  
わるわけじゃないのに。

仁美 ……

太陽 カップルの一方がポジティブってパターン多いの？

仁美 さあ、どうだろうね？

太陽 みんなどうしてるんだろう？ エッチとかしてるのかな？

仁美 それは、カップルだからって、みんながみんなHIVのことカミングアウトしてる  
わけじゃないし、そういうことは二人で話し合つて決めることじゃないのかな？

太陽 やっぱり話さないといけないのかな？

仁美 とりあえず、最初に話したんだから、これからもその方向でいかないといけない  
んじゃないのかね。だつて、そのつもりだったんでしょ？

太陽 わかんない。何となく言わなきゃいけないような気がして言っちゃっただけだから。  
言っちゃうことより、言っちゃった後の方が大事なんじゃないかな？ わかつてる  
と思うけどね。

太陽 そうなんだけどさ。

仁美 そうだよな？

太陽 ねえ、うっちゃんつて、ぼくの質問にみんな疑問形で答えてない？

仁美 え、そうかな？（気付いて）あ……

太陽 それつて、電話相談の規則かなんか？ 質問しながら、巧みに聞き出すとか……

仁美 あ……そうじゃないんだけど、ごめん。クセだと思う。

太陽 そうだよな。みんな自分でわかつてるようなこと聞いているんだもんね。そんなこと  
自分で決めろつてかんじだよな？

仁美 そんなじゃないつて。

太陽 ……ごめんね、何だか言いたい放題で。

仁美 　　いって。

太陽 　　みんなこんなに言いたい放題？

仁美 　　まあね。せつぱつまって電話かけてくるわけだから。

太陽 　　僕も？ 僕もそうだった？ せつぱつまってた？

仁美 　　ううん、全然。落ち着いてた。

太陽 　　あ、それ、家系なの、家系。お茶、どうぞ。

仁美、お茶を飲む。

仁美 　　何これ？

太陽 　　レイボスティー。デトックスだって、うちの母親持ってきたんだけど、マサ飲まな  
いから、ひと月経つのに全然減らなくて。コーヒーにする？

仁美 　　あ、いい、これで。お母さん、もういいの？

太陽 　　うん、心配して損したってかんじ。病院で友達できたんだとかいって、前より元気  
になっちゃって、迷惑してるかんじ。

仁美 　　まだ話してないの？

太陽 　　うん。今度はもう少し慎重にと思って。

仁美 　　……。

太陽 　　だから、まだ。話したのは、うちちゃんとマサだけ。

仁美 　　まあ、それでもいいかもね。

太陽 　　今のところはね。

充 　　そうよね、今のところはね。

　　と言いながら、充が入ってくる。

太陽 　　やめてよ、するつと入ってくるの、びっくりするじゃない。

充 　　ちよつとあんた、だめでしょ、ちゃんと鍵かけなきゃ。知らないわよ。ピッキング  
とかやられたって。

太陽 　　ピッキングって、鍵かかっているドア開けるんじゃないの？

仁美 　　普通はそうだよな。

充 　　いいのよ、とにかく不用心よ。暑いわね。のどカラカラ、何か飲むものちょうだい。  
太陽 　　はいはい。

太陽、退場。

充 　　久し振りじゃない、元気なの？ ティップでも会わないし。

仁美 　　ちよつと腰傷めちゃって。

充 　　やだ、どうしたの？

仁美 風呂場で石鹸とろうとしたら、ひねっちゃって。  
充 それって、ティップで？ どんなポーズとったのよ？  
仁美 そんなんじゃないって。うちだよ。こう普通に。そしたらピキッって。  
充 わかるわかる、何て言うか、「金縛り」みたいなかんじでしょ？ ピキ！って。  
仁美 あんまり金縛りなつたことないから……。  
充 やだ、だいじょぶなの？ 病院は？  
仁美 そんな大したあれじゃないんだけどね、もう若くないから、大事にしようと思って。  
充 そうよ、一人暮らしなんだから、気をつけないと。「お風呂で倒れてそのまんま一週間」なんての発見するのいやだからね。  
仁美 そんなことないって……。  
充 あらやだ、風呂場で孤独死つて多いんだから。  
仁美 ……。

太陽、登場。

太陽 ほれ、エコロジカルなルイボステイだよ。  
充 いただきます。  
太陽 何なのよ、突然来て。  
充 何よ、その言い方。近所まで来たから寄ったのよ。  
仁美 他の理由はないわけ？  
充 いなかったら帰ろうと思ったら、鍵開いてるし、ほんと気をつけなさいよ。  
太陽 わかってる。  
充 うっちゃんは今日は？  
仁美 今日は……  
太陽 ちよつとお茶しない？つて言つて、来てもらったの。それだけ……  
充 何で私も呼ばないのよ？！  
太陽 いいじゃない、来たんだから。もう、黙つてルイボステイ飲め。  
充 ふん。じゃ、いいわよ。教えてあげないから！

充、ルイボステイを飲む。

太陽 何それ？ いやなかんじ。  
仁美 クラスにいたよね、こういう女子。  
太陽 うん、赤い縁の目がねかけて。  
仁美 三つ編みなんだよね、大体。  
太陽 みつちゃん、そんな眼鏡持ってたよね。  
充 先生、太陽くんがいじめるんですけど……つて、何よ、あんたたち、聞きたくないの？

太陽 話したいなら話せばいいじゃん、そんなもったいぶらずに。何よ、話って？

間

充 あんたたち、うまく行ってるの？

太陽 何の話？

充 とぼけたってだめよ、アタシは心配して聞いてんのよ。

太陽 やめてよ、そういうマジなまなざし。

充 どうなのよ？

太陽 みつちゃんちは？

充 うちのことはいいのよ。誠が言ってたんだけど、坂井くん、この頃、しょっちゅう

二丁目出てるって。どうしたんだろうって？

太陽 二丁目くらい、普通に行くでしょ？

充 何言ってるのよ、あんたたち典型的な「相手が出来ちゃったらもう二丁目になんか

行くことないわ」ってクチじゃないの。

太陽 そんなことないって。

充 じゃ、前、二丁目行つたのはいつよ？

太陽 覚えてない。

充 そのくらい昔ってことでしょ？（仁美に）それが、飲みに行くたびに坂井くんに会うんだって。おかしいでしょ？ 何かあったんじゃないかって心配になるじゃない？

仁美 ねえ、誠さんは、いいわけ？ 一人で二丁目行っても？

太陽 そうだよ、行きたび会うってことは、誠さんだって、しょっちゅう一人で遊びに行ってるってことじゃない。他人んちのことより、自分のこと心配したら？

充 うちはいいのよ、前からそうなんだから。ちゃんとわりきってるの。それにアタシ、デブ専の店とか興味全然ないから。でも、あんたたちは違うでしょ？ このひと月、急にだって、何かあったのかって心配になるじゃない。

太陽 いいよ、心配してくれなくて。

充 浮気とかしてんじゃないの？

太陽 やめてよ、無理矢理おもしろくするの。

充 いい、手遅れになってからじゃ遅いのよ。うちの中がきまわずくなって、外に遊びに行つて、悪い病気でももらつてきたらどうすんのよ？

太陽 だいじょぶ。マサはちゃんと気をつけてるから。それにね、そんな相手がいたら、わかるって、一緒に住んでるんだから。

充 今日はどうしたのよ。土曜日なのに、一人でどこ行ってるの？

太陽 出張、昨日から。公務員って、あの年頃になると、大変なんだって。

充 あやしいわね。ねえ、何か思い当たることはないわけ？ 喧嘩したとか？ 私には言いなさい。悪いようにはしないから。

太陽 やめてよ、そうやって、いろいろ聞き出すの。そんでもって、あちこち言いふらすのも。

充 そんなことしないって、するわけないでしょ？

太陽 それを信じて何度死にそうな目にあつたか。僕が派遣切りにあつたこと、マサに言いつけたじゃないか？ 黙ってて言ってたのに。

充 それはだって、しつこく聞かれたもんだから。ごまかしきれてないあんたが悪いのよ。

太陽 もう、ほつといてくれないかな。誠さんにも、そう言つといてよ。心配してくれなくていいからって。

充 あの人は別に心配してないのよ、心配してんのはアタシなの。  
太陽 だから、もういいって言ってるじゃん。

間

充 わかったわよ。じゃ、帰るわ。

太陽 帰れ！

仁美 じゃあ。

充、出ていく。

太陽 退屈なんだよ。誠さん、遊びに行っちゃうから。だから、ああやって、うちに来てはあることないことしゃべって。勘弁してほしいよ。

間

太陽 いつも、仕事で遅くなるって言ってたのに。

仁美 ……。

太陽 全然飲まないのね。二丁目行って何してんだろ？ まっすぐ帰ってくればいいじゃんね？ 嘘つくことないじゃんね？

仁美 まあ、そういうときもあるんじゃない？

太陽 ……。

仁美 ごめん、私も全然飲まないんであれなんだけど？

太陽 ほんと言うと、後悔してるんだ、話したこと。ずっと黙ってればよかったって。そういうのもありだよな？

仁美 まあね。パートナーに、いっとうやって話すかっていうのは、すごく大事なことから。ポジティブだってわかって、頭の中真っ白になって、そのまんま相手に話して、二人でどうしていいかわからなくなっちゃって……ってというのが、一番心配かな。でも、太陽はそうじゃなかったから。



太陽 そんなことないよ、僕だって、頭のなか真っ白だったよ。でも、嘘ついたんだよ。ていうか……自分のことじゃないみたいだったんだ。

間

太陽 ねえ、飲み行かない？

仁美 これから？

太陽 まだ、ちよつと早いけど、行こう。僕もひきしぶりだし。そうだ、何か配ったりする仕事ないの？ コンドームとか。手伝ってもいいよ。

仁美 坂井くん、帰ってくるんじゃないの？

太陽 遅いつて言ってたもん。

仁美 じゃあ、まだ早いからお茶もう一杯もらってから。

太陽 いいよ、無理しなくて。

仁美 無理じゃなくて、喉かわいた。

太陽 うん。

太陽、キッチンに向かう。

真人が入ってくる。

太陽 おかえり。

真人 おう。(仁美に) あれ？

仁美 どうも。

太陽 早かったじゃない。

真人 うん。

太陽 そうだ、お茶入れるんだったね。ちよつと待ってて。

太陽が退場。

真人 どうしたの？

仁美 いないから、ゆつくり話ができるって。

真人 なんだ、そうなんだ。

仁美 太陽にも言ったんだけどさ、やっぱり二人で話した方がいいって。絶対不自然ですよ、二人が別々に私に相談してるのって。

真人 一度、二人で一緒に会った。

仁美 そうだけど……、その後、別々に電話かけてきたら、何よ、あんたたちそんなこと考えてんのって……

真人 そういうもんでしょ。

仁美 だから、言ってるじゃない、いつも。私抜きにして二人でちゃんと話しなっ

真人 うっちゃん専門家だから。  
仁美 そういうことじゃなくて。

真人 話したがりないんだよ。

仁美 太陽もそう言ってるんですけど。

真人 ほんとだって！ ていうか、何も聞かないでおくのも思いやりつてもんじゃないかなと思つて。

太陽が戻ってくる。

太陽 (真人に) うっちゃんとね、飲みに行こうかって話してたの、一緒に行かない？

真人 今、帰ってきたばかりなんだけど。

太陽 じゃ、一息ついてから？

真人 俺はパス。

太陽 いいじゃん、行こうよ。

真人 飲み会振つて帰つてきたんだよ。なんでまた出掛けるんだよ。

太陽 明日休みでしょ？

真人 まとめなきやいけない資料があるの。

太陽 明日やんなよ。

真人 あのね……

太陽 いいよ。(仁美に) 僕たちと一緒にじゃおもしろくないんだって。

真人 そんなこと言つてないって。

太陽 一人で行く方が気楽なんでしょ？ のびのびできて。

真人 そんなことないって。

太陽 いつも仕事で遅くなるって言つてたの、仕事じゃなかったんじゃないの？ 誠さん、よく会うつてみっちゃんが、教えてくれたけど。別にね、別に、責めてるわけじゃない。飲みに行くとかさ。ただ、別に嘘つかなくてもいいじゃないって、そう思うわけ。

真人 嘘つてなんだよ？

太陽 違うわけ？ ねえ？

仁美 (手を挙げて) はい！

二人、一息。

仁美 じゃ、あたし帰るから。あとは二人でゆっくり話し合つてちょうだいということだ……

太陽 だめだよ、飲みに行くつて言つたじゃない。

真人 そうだよ、最後までちゃんと聞いてくれないと。

仁美 だから……

二人 座って！

仁美 ……じゃあき、「私に」じゃなくて、「二人で」しゃべってくれるかな？ 私はただの傍観者ということでは……

太陽 わかつてるよ。

真人 わかつてる。

仁美 わかつてないと思うんだけど……、じゃ、傍観者はやめる。だったら、私に向かって話すということでは？

二人 え？

仁美 ほら、前に三人でしゃべったじゃない？ そのパート2ということでは？

二人、微妙なかんじ。

仁美 正直に言わせてもらおうと、困っちゃうんだよね。二人とも昔からの友達だから、話は聞くけど、二人から、それぞれ別についていうのは……。何だか？ だから、どうせなら、ここで二人まとめて、一緒についていうことでは？

太陽 いいよ。

真人 いいけど。

仁美 じゃ、どうぞ。

太陽 そんなどうぞって言われても……

仁美 (真人に) 太陽に言いたいことは？

真人 え？ そうだなあ。

仁美 太陽はどう？

太陽 どうって……

二人、お互いを気にして、なかなか話せない。

仁美 今の続きでもいいんじゃない？ 坂井くんは何で太陽にだまってたわけ？

太陽 だまってたんじゃない、嘘ついた。

真人 嘘って何だよ、嘘ついてるの自分じゃないか？

太陽 何よ、僕の嘘って？

間

真人 何でもない。

太陽 何？ やめてよ、変な言いがかり。

真人 ほんとに隠してることはないっていうわけ？

太陽 ないよ。

真人 もう、いいよ。やっぱりやめる。

真人、奥の部屋に向かう。

太陽 最後まで言いなよ。(仁美に)ちゃんと話した方がいいんだよね。そうだよね。  
仁美 うん。

間

真人 仕事で遅くなるって嘘ついて遊んでたのは悪かった。  
太陽 ほら、認めた。

真人 でも、遊んでたのは俺だけじゃない。

太陽 ……。

真人 先週の木曜の夜、どこにいた？

太陽 うちにいたよ。帰ってきたとき、僕いたでしょ？ 帰ってくるのすごく遅かったけど。

真人 その前はどこにいた？ その前は？

太陽 ……その前？

真人 いたんじゃないのか「ヤリ部屋」に、ハッテン場。渋谷の「ジャングルジム」。

太陽 そんなところ行くわけじゃないじゃない。

真人 が行ってたんだよね。

太陽 やだな、誰がそんなこと言ってるの？ みっちゃん？ 誠さんが見たとか言ってるわけ？

真人 見たのは、俺だよ。

間

太陽 やめてよ。ふざけるの。

真人 ふざけてない。そうだよ、嘘ついたよ、あの日も「仕事で遅くなった」って。知らん顔して。すっごい大変だったよ。

太陽 ……そうだったんだ。やっぱりそうだったんだ。  
真人 え？

太陽 似てる人がいるなと思ったんだけど、スーツ着てなかったからよくわかんなかった。暗かったし。

仁美 ちよつと待って、何、それって全然聞いてないんだけど、どっちからも。

太陽 話してないもん。

真人 こんなこと人に言えない。

仁美 まあ、そうだけど、でも、今、言っちゃっていいわけ？

太陽 いいよ！

真人 うん、いいと思う。

間

太陽 (仁美に) 何でそんなところに行つたのか聞いてくれる？

真人 (同じく) 俺も聞いてほしい。

仁美 だから、直接話せばいいんじゃないのかな？

間

太陽 言い訳っぽく聞こえるかもしれないけど、昔、あそこ行つたことがあって、そのとき何度か会つた人に会えないかなって思つて。

仁美 会つてどうすんの？

太陽 わかんないけど、知らん顔してるのよくない気がして……、もしかしたら、むしろ僕のこと探してたりするかもしれないと思つて。名前も何も知らないから、もしかしたらと思つて、行つてみたんだよ。

真人 そんな相手がいたんだ。

太陽 昔の話だつて言ってるじゃない！ つきあいはじめてからは全然。信じないかもしれないけど、ほんとだから。

真人 ……。

太陽 時々、顔出してたら、もつと早く会つてたかもしれないね。

真人 ……。

太陽 (仁美に) どのくらい行つてたのかつて聞いてくれるかな？

仁美 あ……

太陽 (仁美に) 最近のことなのかな？ それとももつと前から？ 僕がポジティブになつてからのかな？ あのと一緒だった相手とは、あそこで会うだけなのかな？ いやなら、いやだつて言つてほしいって、伝えてくれる？

真人 初めて行つたんだよ。ハッテン場なんて。どんなところかなつて、興味あつて。でも……

太陽 でも……？

真人 メアドもらつた。すぐ捨てようと思つたけど、捨てられなくて一度メールした。

太陽 なんてメールしたの？

真人 つきあつてる相手がいるんで、ごめんつて。信じないかもしれないけど。

太陽 信じるよ。

間

仁美 あ、何て言うか……、こういうの考え方じゃないかな？ もつと愉快つていうの？

すつごい偶然なわけじゃない。ね？ だから、それをおもしろがって、一緒に笑って、楽しくみんなまで飲みに行く……。あたしも久し振りに飲んじやおうかな！ さ、行こう！

間

真人 もう一つ、話があるんだけど。

太陽 何？

真人 ここ出ていきたいんだ。

仁美 坂井くん……

太陽 いいよ。

真人 理由は聞かないの？

太陽 いいよ。僕のHIVのせいだよ。

真人 それは……

太陽 違うの？

仁美 ちょっと待って、二人とも。もう少し考えた方がいいんじゃないかな？ そんな売り言葉に買い言葉でそんなこと決めたらきつと後悔すると思うよ？

真人 前から考えてたんだ。今、決めたわけじゃない。

太陽 そうだったんだ。それも初めて聞いた。

間

太陽 じゃ、飲みに行こうか？ 三人で。

仁美 ……。

太陽 行こう、もう、隠してることは何もない。

真人 俺はいいよ。

太陽 そう。じゃ、うちちゃん行こう。

仁美 でも……

太陽 行くよ！

太陽、出て行こうとすると、充が登場。

充 ごめんなさい。やっぱり謝ろうと思って、するつと入ってこようと思ったんだけど、何だか入りづらい雰囲気だったんで、そこでずっと聞いちゃいました。ごめんなさい。

間

太陽 話す手間はぶけてよかった。じゃ、みんなにも言ってくれちゃっていいから。僕の病気のことも。マサと別れたってことも。じゃんじゃん言いふらして！

充 そんなこと言うわけないじゃない。

太陽 いいよ。言わないって言って、話されるのいやだから。

充 何言ってるのよお！

太陽 聞いてたと思うけど、これから飲みに行くの。一緒に行かない？

充 私は……

太陽 あ、そう。じゃあね。

太陽、出て行ってしまっ。

仁美 あ……（真人に）じゃ、とりあえず行って来るから、後で連絡する。

真人 ……

仁美、出ていく。

充 ちょっとあんたどうすんのよ？

真人 さあね。

充 かつこつけてる場合じゃないでしょうよ。

真人 帰ってくれるかな？

充 でも……

真人 ……

充 ……わかったわよ。私、誰にも言わないから、ほんとよ。あ、あんたがここ出てくってことは、すぐにあれだけど、でも、何で出てったとかそういうことは。あ、でも、どうしよう？ ねえ、出てくって、いつ？ 前から考えてたって、行くあてはあるの？ もしかして、新しい相手ができたとか？ やっぱりそうだったの？！

真人 （にらむ）

充 はい、わかりました。誰にも言いません。じゃ、帰るわね。ショックだわ。

充が出て行くこうとすると、敦子が入ってくる。

敦子 あら、こんばんは。太陽とそこで会ったの。坂井くんいるって聞いたから。ごめんなさいね。（充に）初めまして、太陽の母です。

充 どうも……

敦子 あなたたち、晩ご飯まだなんですよ？ あなたもよかったら、一緒にどう？

充 ……

敦子 じゃーん、今日はそうめんよ。夏はやっぱりね。そうめんって、一人で食べてもおいしくないのよ。具もいろいろ取りそろえてみたから。キッチン借りるわね。すぐ

できるから。

敦子、キッチンへ消える。

充 (真人に) やっぱりだめよ。鍵はかけなきや。

\*

\*

\*

\*

\*

仁美と真人が携帯電話で話している。

真人 もしもし……あ、俺だけど。

仁美 よかった。電話しよう思ってた。

真人 太陽、そっちいる？

仁美 なに帰ったんじゃないの？

真人 連絡ないけど……

仁美 私も終電で別れてそれっきりなんだけど……

真人 そうなんだ、どこ行っただらう？

仁美 探してみないの？

真人 まあね…… そのうち帰ってくると思うけど。

仁美 そんなのんきなこと言ってるいいいの？

真人 しょうがないよ、帰ってこないんだから。

仁美 出てくって話、本気なの？ どうしてなのかな？

真人 何て言うか……、こわくって。

仁美 こわい？ こわいって何が？

真人 わからない。でも、ポジティブだって言われて。それで、何だかわからなくなつて。

ううん、そうじゃない。あのときに、昔死んだ犬の話をして。それでからか……？

仁美 何なの、犬って。

真人 子犬の時からずっと飼ってて、それがさ、フィラリアで死んだんだよ。おれが高校の時。あんまり苦しがるから、クスリ飲ませて楽にしてやろうって。最後はずつと抱いたまま。それから決めたんだ、もう犬は飼わないって。

仁美 それと太陽とどういう関係があるの？

真人 だって……

仁美 ねえ、おかしいと思うよ。一緒に住んでて長いんだから、いろいろあるんだらうけど、それだって、パートナーがポジティブだってわかったら、もう少しなんていうか、あたたかく対応っていうか…… わかっていると思うんだけど。

真人 しょうがないんだよ。



仁美 ハッテン場であったことはもういいじゃない、きれいに忘れてさ。

真人 そんなことじゃない。

仁美 太陽を一人にしちゃっていいわけなの？

真人 だから……

仁美 昔は、そうやって、一人になっちゃう感染者がいつぱいいた。私が最初にあつた人もそうだった。親にも兄弟にも見放されて、家の恥だつて。でも、その人は、ボランティアグループのメンバーと楽しく生きてつた。でも、家族はね、葬式にもこなかった。もう、今はそんなんこと、ほとんどない。なんでそれがわからないかな？

真人 わかつてはいるんだよ。でも、どうしようもないんだ。

間

真人 二人で一緒にニュース見た。去年のエイズの発症者が過去最多つて。半数以上が同性間の性的接触によるものだつて。だから気をつけないとつて話して、一緒に検査受けた。でも、全然他人事だつたんだ。それなのに……。

仁美 ゲイの感染率が高いつていう数字は、それだけたくさんの人が検査受けてるつてことでもあるから。

真人 これまでずつと他人事だと思つてた数字の中に、間違いなく自分たちもいるんだつてわかつて……

仁美 わかつて、それで逃げ出すわけ？

真人 出ていくのは悪いと思つてる。でも、今はそうしないわけにはいかないんだ。わかつてもらえないと思うんだけど……

仁美 ……。

真人 太陽のことよろしく。太陽は一人じゃないつて。友達だつてたくさんいるし、敦子さんとだつてうまくやつてる。おれがいなくなつたつて別に大丈夫だと思うんだ。

仁美 ……わかつた。

真人 じゃあ。

二人電話を切る。

\*

\*

\*

\*

\*

永田町、首相官邸前の交差点から少し離れた通り。

夜、遅い時間。

太陽が歩いている。

裕二の声 やあ！

太陽が立ち止まる。

裕二がやってくる。「集団的自衛権行使反対」のプラカードを持っている。

裕二 また会ったね。

太陽 今日もデモの帰り？

裕二 今日もって何？

太陽 だって、それ。（プラカードを指す）

裕二 そっちこそ。

太陽 新しい仕事先が近くなの。帰り。ちよつと見てみただけだから。

裕二 ふーん。

太陽 やっぱりそういう人なんじゃない。デモとかしちゃう人。

裕二 デモじゃないから、抗議活動。

太陽 でも、もう決まっちゃったわけでしょ。閣議決定。

裕二 うん。

太陽 でも、抗議するんだ。

裕二 うん。なんだか黙ってるのいやだなあと思って。やっぱり心配性なんだと思う。

太陽 へ？

裕二 この間言われたじゃない。心配性だって。ほんとにそうだと思っとき。なんだか心配になっちゃうんだよね。HIVのことだけじゃなくて、いろんなことが。だから、あちこち行っちゃう。反同性愛法の抗議でウガンダ大使館前にも行った。新大久保のヘイトスピーチに反対したり、昨日と今日は官邸前で、集団的自衛権行使容認の閣議決定に抗議。

太陽 ねえ、それって、やっぱりそういう人だってことじゃないの？

裕二 そっちだって、そうなんじゃないの？ また会ったし。

太陽 だから、僕は違うって。

裕二 へえ、そうなんだ。

間

太陽 昨日、すごい人集まってたじゃない。首相官邸前。4万人？ そういうのってどんななんだろうなと思って、今日来てみた。

裕二 どうだった？

太陽 抗議しなきゃっていうのはわかるんだけど、僕も一緒にやるっていうのは違う気がする。

裕二 自分のことだと思えない？

太陽 そういうんじゃないんだけど。みんなすごいなあと思って。

間

裕二 元気にしてた？

太陽 まあね。

裕二 どうかした？

太陽 みんなに聞かれるんだよね。元気って？ 元気だよ。ポジティブだってだけで、全

然、元気です。

裕二 ごめん。

太陽 いいよ。

裕二 もう帰るの？

太陽 うん。

裕二 これから2丁目行くんだけど、よかつたら……

太陽 ごめん、飲むのやめたんだ。

裕二 そうじゃなくて、2丁目にakta（アクタ）っていうHIVのサポートセンター

があるんだけど……

太陽 aktaって、いつもうちちゃんがいる？

裕二 仁美さんの知り合い？

太陽 うん。

裕二 そうなんだ。

太陽 これから行くの？

裕二 うん、2丁目の店にコンドーム配るボランティアの打ち合わせがあつて……

太陽 デリバリボーイズ？

裕二 そう、知ってた？

太陽 うん、知ってる。へえ、そうだったんだ。

裕二 どつかで会ってたかもしれないね。

太陽 いや、akta行ったことないから。

裕二 知り合いなのにな？

太陽 うん。

裕二 行ってみたら？ これから行こうよ。

太陽 いいよ、僕、そういうんじゃないから。

裕二 そういうんじゃないって？

太陽 だから、そういうボランティアとかする人。

裕二 いや、そうじゃなくて、HIVの相談とか……

太陽 僕はもうポジティブなの。今から気をつけても、もう遅いから。

裕二 そういうことじゃなくて……

太陽 大丈夫だよ、心配してくれなくて。

裕二 あの、余計なお世話かもしれないけど、もっと心配した方がいいと思うな。

太陽 わかってる。でも、しょうがないんだよね。

裕二 ……。

太陽 じゃあね。

太陽、歩き出す。

裕二 地下鉄の駅、そっちじゃないよ。

太陽 少し歩きたいだけ。

太陽、去る。

裕二、しばらく見送っているが、後を追って退場。

\*

\*

\*

\*

\*

秋。十月。

同じ部屋。

週末の午後。

充と仁美がキッチンから出てくる。

それぞれ、飲み物のカップを持っている。

充 これでローストビーフはOKと。

仁美 あんな固まりが焼けちゃうなんてすごいね。

充 大きなオーブンあるんだもん、使わなきゃ。宝の持ち腐れ。

仁美 坂井くん、いないからね。

充 何だかね、きれいなまんま、これっぽっちも使われてないのが、とつてもわびしい感じ。ケーキも焼いたし、あとは冷めてからデコレーションするだけ。ちよつと一息ね。太陽、帰ってきたら、一緒にやりましょ。

仁美 バースデーケーキでしょ？

充 いいのよ、イベントなんだから。わいわいやるの。

二人、座る。

充 ねえ、何した、プレゼント？

仁美 あ……秘密。

充 いいじゃないよ。どうせあとでわかるんだから。

仁美 あとでわかるんだつたら、今、教えなくてもいいんじゃないかな？

充 アタシはね、どうしようかって、いろいろ考えたんだけど、ちよつとすごいわよ。

仁美 何なの？

充 エイズの特効薬。

仁美 え？

充 なんてのがあればいいんだけど、そういうわけにもいかないからね。でも、これはかなり元気が出るブツよ。

仁美 何なの、それ？ 違法だつたりしないよね？ つかまらないよね？

充 たぶんね……

仁美 ホントにダイジョブなの？

充 だいじょぶ、だいじょぶ。若い男子を約1名つてかんじかな？ 新しい男をプレゼント。先つちよにリボン結んで。

仁美 誰なの若い男つて。知り合い？

充 さあね？

仁美 今日、呼んでるのは、誠さんと、ケンタとか、ノブくんに、ゴツちゃんでしょ？  
この中にはいないよね？

充 うん。ていうか、みんな若くないでしょ。

仁美 そうだよ、この中の誰かと太陽がどうにかなるなんて、坂井くんと寄り戻す方がよっぽどかんたん。

充 あ、一応、坂井くんにも声かけといた。

間

仁美 目的がよくわからないんですけど？

充 「下手な鉄砲も数うちやなんとか」つて言うでしょ。それよ。ていうか、だめだつた場合の保険ね。私、そういうところぬかりがないの。

仁美 それはまずいでしょ？

充 どうして、あの二人、近頃まれに見る、きれいな別れ方だつたと思うわよ。

仁美 そうかな、引つ越し、すごいで微妙だつたけど。

充 考えすぎよ、ていうか、考えてもしようがない。忘れるのよ。過ぎたことは。

仁美 太陽、一人で元気にやつてるじゃない。陽性者のミーティングにも顔出して、新しい友達もできたみたいだし。そこに新しい男をどうこうつて、そこまで世話焼かなくていいんじゃないかな？

充 いいのよ、遊びなんだから、遊び。会つてみて、はずみでできちゃつたら、超ラツキーつてかんじじゃない。

仁美 何、マジじゃないの？

充 当たり前でしょ。

仁美 なんだ、そうなんだ。

充 でも、ちょっと本気かも。

仁美 は？

充 私、太陽がここに一人で住んでるっていうのがすっごい心配なの……。だって、考えてみなさいよ。感染がわかって半年よ。これからだんだん寒くなって。ふつと寂しくなったりするんじゃない？ ふつと「死んじゃおかな」なんて思っちゃうかもしれないじゃない。いやなのよ。睡眠薬飲んで自殺して、十日経ってから発見なんの。

仁美 やめてよ。

充 とにかく、私は心配なの。だから、何とか、太陽に新しい男を見つけてほしいわけでも、一人になりたいときには、そつとしておいてあげないといけないんじゃないのかな？

充 一人になりたいかどうかなんてわかんないじゃない。ほんととは二人がいいんだけど、しかたなく一人でいるんじゃないの？ そういうもんじゃないの？

仁美 でも、あんまり世話やきすぎるのも……

充 もうしょうがないのよ、考えるとドキドキしちゃうんだもん。アタシ、まだ実家にいたとき、伯父が死んだのよ。一人暮らししててね。アタシ、まだ学生だったから、夏休みでうちにいたのよ。午後だったわ。そしたら、電話がかかってきて。伯父が住んでたマンションの大家さんから、伯父が死んでるって。電話の向こうでパトカーのサイレンが鳴って。会社の人十日間ずっと連絡がつかないんで見に来たら、中から変なおいがしたんだって。で、大家さんに連絡して開けてもらったら、もう……。真夏の十日で死んだ人間がどんなになるかわかる？ 片づけるの大変だったって。うちの親言ってた。アタシは、こわくて行けなかったの。今でも怖いのよ。いつか誰かが死んだって電話がかかってきたらどうしようって。その電話の向こうで、パトカーのサイレンが鳴ってたらどうしようって。だから、心配なのよ。あんたも。

仁美 わかった。気をつけます。

充 死んだらできるだけ早く発見するようにするからね。いい、電話はライフラインよ。それからメールもフェイスブックもツイッターも。普段からまめに連絡をとりあわないとって、私ほんとに思うのよ。

太陽の声 ただいま！

太陽が帰ってくる。

充 今話したこと、太陽には内緒だからね。  
仁美 ……うん。

太陽が入ってくる。

太陽　すごいね。ケーキ、あんなに大きいの焼いたんだ。

充　一番大きい型買ってきたのよ。後でみんなで飾り付け。

太陽　OK。

仁美　どうだった？

太陽　変化なし。まだ、免疫も下がってないし。新しいクスリの話とか聞いてきた。でも、できるだけ、飲み始めるの先にしたいなと思って。あれ、時間通りに飲まないといけないんでしょ？

仁美　まあね。

太陽　そういうの、苦手だから。それに、新しいクスリが出たときに、飲み始めてると、効かなかつたりするんでしょ？　だったら、まだこのまんま。風邪ひかないように気をつけて、普通に暮らしてればいいと。

充　よかつたわね。

太陽　うん。なんか天気悪くなってきたよ、雨降りそう。ちよつと洗濯物とりこんでくる。こつちの支度はそれからね。

仁美　手伝おうか？

太陽　いいって。

太陽、上手に退場。

充　あの女も変わったわよね。前は洗濯ものなんて、全部乾燥機に入れておしまいだつたのに。

仁美　それっていい変化じゃない。

充　でも、震災からこつち、何がとんでくるかわかんないんだから。うちは部屋干しと乾燥機が基本よ。

玄関のチャイムの音。

仁美　誰だろう？

充　やだ、もう来たの？　早すぎ。

仁美　（呼ぶ）太陽！

充　聞こえないわよ。ベランダ出てるから。いいわ、私行く。

充、玄関へ向かう。

とその途中で入ってきた男（泉謙吾）に出っくわす。

謙吾　ごめんなさい。鍵開いてたから。

充　あの……

謙吾 太陽は？

仁美 (奥をさして) 今、洗濯モノ取り込んでるけど……

謙吾、すごい勢いで奥へ走っていく。

仁美 あ？

充 何ぼーっとしてんのよ、行くのよ。

仁美 だって、知り合いじゃないの？

充 知らない男よ。

仁美 え？

二人が奥へ走っていくこうすると、謙吾が太陽をひきずって出てくる。

太陽 痛いよ、放してよ。

充 ちよっと、あんた何してんのよ。

謙吾は、太陽を締め上げている。

充 やめなさいよ！ くらー！！

二人がかりで、ようやく引き離す。

充 なんなのよ、あんた？

謙吾 (太陽に) 逃げようとしただろ、さっき？

太陽 そんなことしてないって。

謙吾 いや、逃げた。廊下ですれちがって、俺が振り返ったら、お前もこっち見てて。あつと思つたら、さっきとまた歩き出して……。

太陽 一瞬、そうかと思つただけど、やっぱり別人だと思つたんだよ。

謙吾 あの顔は「しまった」って顔だった。

太陽 そんなことないって。だから、今だって、「ひさしぶり」って声かけられて、「あれ、なんでこんなところにいるんだろう」と思つたけど、「わあ、ひさしぶり!!!」って返事したじゃない。

謙吾 嘘だ！

太陽 嘘じゃないって！

仁美 話が全然わかんないんだけど。

充 もう少しわかるように説明して。

謙吾 だから、こいつが逃げたんだよ！



謙吾、また太陽にとびかかろうとする。  
充が、がっちり押さえる。

謙吾 放せ、このやろう！

充 もう暴れないって約束しなさい。

謙吾 ……。

充 うっちゃん、やっちゃって。

仁美 ……了解。

仁美、謙吾をやっつけにいくかと思いきや、くすぐりはじめる。

謙吾

(笑いながら) やめろ、やめろよ、そこはやめろ、やめて下さい、わかったよ、大人しくするから、やめてくれて。

仁美、やめる。

充 ご苦労様。どういうことなの？ ていうか、あんた誰？

太陽 昔つきあってた相手。さつき病院で会ったらしい…

謙吾 らしいだつてさ。

太陽 あとつけてきたわけ？

充 病院で会ったつてことは、もしかして、あんたも…？

間

謙吾 そうだよ。はじめまして、俺も、エイズです。誰かさんのせいだね。

太陽 ……！

充 いいかげんなこと言うのよしなさいよ。

謙吾 関係ないのに、クチ出すな。

充 関係なくないわよ。悪いけど、私たちは、太陽のサポーターよ。

太陽 みっちゃん…。

充 あんたの病気が、太陽のせいだつていう証拠でもあるわけ？

謙吾 ああ。

充 何、それ、どういうことよ？

謙吾 こいつと会ってなかったら、俺は、エイズになんかならなかったんだよ。

仁美 つき合ってたのっていつのことなの？ 最初に会ったのはいつ？

謙吾 え？ 高校二年で同じクラスになって…

充 やだ、同級生なの？ 信じられない。

謙吾 (にらむ)。

充 あ、ごめんなさい。

仁美 で、別れたのはいつ？

太陽 二十歳のとき？

謙吾 ああ。

充 ってことは、太陽はそんな昔から、ポジティブだったってこと？ やだ、そうだったの？

太陽 違うよ。

仁美 別れてから、時々会ってたりとかしてたの？

太陽 してない。

充 (謙吾に) そうなの？

謙吾 ああ。

仁美 それじゃあ、あなたのウイルスが太陽から来てるってことは、絶対にありえないと思うんだけど。

充 そうよ、言いがかりよ。

謙吾 でも、こいつと会ってなかったら、俺は、絶対に、エイズになんかなってなかったんだ！

充 何言ってるのよ。ばっかじゃないの。

間

太陽 (謙吾に) あれから、どうしてたの？ 結婚するって言ってたけど。

謙吾 ……したよ。

太陽 今も…？

謙吾 ああ。

充 (仁美に) なんだ、バイだったんだ。

仁美 ……！

太陽 奥さん知ってるの？ 病気のこと？ 奥さんはダイジョブなの？ ねえ？  
謙吾 嘘だよ。結婚なんてしてないよ。できるわけないじゃん。

間

仁美 ねえ、もしかして、こういうことかな？ あなたは、もともとゲイじゃなかった。

それが太陽とつき合ってるうちに、どんどん、そっちに行っちゃって、で、そんな自分がいやだったんだけど、どうにもならなくなって。太陽と別れてみたんだけど、ずるすると男とつきあってるうちに感染してしまったと。

謙吾 ……。

充 なるほどね。あり得るわ。(太陽に) あんた、罪なことしたわねえ。

太陽 ……。

充 あ、ごめんさい。（謙吾に）人のせいにするのよしなさい。それって、やっぱり、言いがかりじゃない。ていうか、八つ当たりよ。ていうか……他に何かいい言葉ないかな？

仁美 逆恨み？

充 ああ、それぞれ。太陽のせいなんかじゃないじゃない。謝りなさいよ。

謙吾 なんだと？

太陽 もう、いいよ。ちよつと、二人とも買い物に行ってきたくれるかな？ ビール、買ってくるの忘れた。

充 でも、一人でだいじよぶ？

太陽 だいじようぶ。

充 ……わかったわよ。（仁美に）じゃ、行くわよ。

仁美 （太陽に）何かあったら、電話して。

太陽 ありがとう。

二人、出ていく。

間

太陽 お茶入れようか？ 何がいい？ コーヒーだめなんだよね？

謙吾 ……。

太陽 ……ごめんね。

謙吾 何で謝るわけ？

太陽 やっぱり、ちよつと責任感じてるし。

謙吾 お前のせいじゃないよ。

太陽 ……でも。

謙吾 俺、別れて少し経ってから、検査受けたんだよ。そのときはなんともなかった。それで油断したんだよな。

太陽 ……。

謙吾 知ってたんだよ。お前のせいじゃないって。でも、どうしていいかわからなくて。今まで誰にも怒れなくて。誰かを「お前のせいだ！」って怒鳴って、ぼこぼこにしてやりたいんだけど、そんなやついなくて。さつき、お前、何だかすつこい元氣そうで。なんだか、むちゃくちゃ腹立ってきて。

間

太陽 いつ、わかったの？

謙吾 去年の暮れ。風邪が全然治らなくて、どんどん苦しくなって。で、医者行ったら、そうだった。

太陽 僕は今年の6月。

謙吾 そうなんだ。

問

太陽 なんて、あのとき、結婚するなんて？

謙吾 なんとか普通になりたいと思っただし。うまく行くと思っただけけど、ダメだったわ。

謙吾、ソファに寝っ転がる。

太陽 今はどうしてるの？

謙吾 どうって？

太陽 誰かいるの？

謙吾 いない。

太陽 そう。僕も。こないだ別れたとこ。

謙吾 でも、すっげえにぎやかじゃん。

太陽 あ、今日、僕の誕生日だから。みんなでわいわいやってくれてるだけ。

謙吾 (思い出す) あ、そうか。

玄関のチャイム。

太陽 やだな、もう帰ってきた？

敦子が入ってくる。よそいきの服装。

敦子 こんにちは。

太陽 何よ。

敦子 何よじゃないでしょ、あんた誕生日じゃない。

太陽 呼んでないんですけど。

敦子 だから、プレゼントはなしね。食べるもんだけ、適当に買ってきたから、あとは好きにしないさい。

太陽 そういうのもいって、言ってるじゃん。食べきれないって、一人なんだから。

敦子 あんた何にもしないんだから、坂井くん見習って少しは料理しないさい。

太陽 もういいから、帰ってよ。ていうか、何、その格好？

敦子 今日ね、高校の同窓会なのよ。いつもみたいに担任として呼ばれてるんじゃないかって、ほんもののね。なんだか、ドキドキしちゃってね。だって、最後に会ったの二十歳とかそんなよ。だからもう……

太陽 三十年以上ぶり？

敦子 うるさい。みんなおじさんやおばさんになってるんだろうなと思ってさ。でも、少

太陽 しても若いとこ見せたいじゃない。で、どうかなと思って。ね、どう？  
どうって何よ？

敦子 ほめて！

太陽 は？

敦子 ほめてよ。景気づけに。なんなら、ここで軽くいっぱいやってつてもいいくらいな気分なのよ。

太陽 化粧もきつちり分厚いし。ストッキングの伝線……もないし。いいんじゃないの？  
敦子 ありがとう。あ、そうだ、ちよつとこつちいらつしやい。

太陽と並んで立つ。

太陽 何？

敦子 ねえ、どうかしら？

謙吾 俺？

敦子 親子に見える？

謙吾 それはまあ……

敦子 ああ……やっぱり。

太陽 親子なんだから、当たり前じゃない。

謙吾 うん。

敦子 あら……？ ねえ、私、あなたに会うの初めてじゃないわよね。

謙吾 ……ええ、まあ。

敦子 ……（太陽に）誰だっけ？

太陽 謙ちゃん。

敦子 同級生の？

太陽 うん。

謙吾 お久しぶりです。

間

謙吾、帽子をかぶりなおす。

敦子 ……やだ、すっかり……大人になって。

謙吾 ……。

敦子 やだ、何、そういうことなの？

太陽 さつき、ぼったり会ったの、僕も会うのすつごい久し振り。

敦子 あ、そう。（謙吾に）お父さん、お母さん、お元気？

謙吾 ええ。

敦子 今もあつちに？

謙吾 僕はこつちで一人暮らししてます。

敦子 あ、そう。よろしくお伝えくださいね。すっかり、ごぶさたしちゃって。  
謙吾 はい。

太陽 時間、いいの？

敦子 あ、そうそう。じゃあ、行くわね。(謙吾に) どうも。  
謙吾 どうも。

敦子、太陽を呼んで。

敦子 もしかして、またつきあいはじめたの？ 坂井くんかわりに。

太陽 そんなじゃないって。

敦子 坂井くん、要町に引越したんだって。知ってる？

太陽 知ってるよ。やめてよね、連絡とったりするの。

敦子 してないわよ。そんなには。でも、何であんたたち別れたの？ それがどうもよく

わかんないのよね。

太陽 いろいろあるんだよ。じゃあね。

敦子 私は、反対よ、余計なお世話かもしれないけど、あの人より、坂井くんの方が絶対

にいいって。

太陽 やめてよ！！

敦子 じゃ。帰りにまた寄るから。遅くなるけど。

太陽 はいはい。

敦子、退場。

謙吾 人のこと言えるかよ。自分だって、あんなに太ったくせに。

太陽 ねえ、もう少しいれば。そろそろみんな来るし。

謙吾 みんなって、みんな知ってるの、病気のこと。

太陽 いろいろ。そんなみんなには話せない。謙ちゃんは？

謙吾 話す相手なんていないし。

太陽 仕事は？ 今、何してんの？

謙吾 ……？

太陽 僕はね、いいかげんなバイト。ビルの掃除。派遣だから、結構お金になるし、さばさばしてる職場だから誰にも話してない。謙ちゃんは？ まだ、道路工事？

謙吾 まあね。

太陽 そうなんだ。環八とか通るとき、あ、このへん掘ってたなあっていつも思い出していた。

謙吾 でも、もうやめた。病気のこと同僚に話したら、上に伝わっちゃってさ。クビ。

太陽 そんなことできるの？

謙吾 だから、訴えてやるって言ったたら、すぐ取り下げて。ま、俺も言ってみただけだつ

太陽 たんだけど。そしたら、すつごいヒマな部署に異動。完全な窓際。定年間近のおやじと一緒に朝から晩までぼーっとしてて。だから、やめてやった。

謙吾 じゃ、今は？  
俺もフリーター、知り合いの土建屋から仕事もらって、図面引いたり、現場監督とか細々と。病院行くのに、平日結構休まないといけないしさ。復興支援にオリンピックで、ようやく忙しくなってきたつてのに。

玄関のチャイム

太陽 今度こそ帰ってきた。あ、もうだいじょぶだから、ひどいこと言わないから、ゆっくりしてって。

謙吾 でも……

太陽 いいから……

とやりとりしていると、やってきたのは真人である。

真人 ごめん、誰もいないのかと思って。鍵開いてたから。

太陽 久しぶり。

真人 (紙袋を手になっている) これ、「アナと雪の女王」のDVD。間違っって持っつてっやっつて。

太陽 いいのに。

真人 まだ見てないっつて言っつてたから。

太陽 ありがと。

真人 あ、誕生日。

太陽 うん。

真人 みっちゃんに來ないっつて誘われて。どうしようかなと思っつてたんだけど、なかなかあれで。どうせなら、こういう日に会っつちやいなさいよっつて、みっちゃんが。

太陽 みっちゃんが？

真人 一度は断っつたんだけど。やっぱり、久しぶりに会いたいなと思っつて。

太陽 ……

謙吾 ちよつとトイレ……

太陽 玄関の左側。

謙吾、退場。

真人 誰？

太陽 昔の知り合い。

真人 そう。

太陽 つき合ってた相手。

真人 そうなんだ。あ、今日、みんな集まるんだって？ みつちゃんに聞いた。

太陽 まあね。

真人 みつちゃんは？

太陽 うつちゃんと買い物に行ってもらった。

真人 そうか。元気なの？

太陽 みつちゃん？

真人 そうじゃなくて……

太陽 僕？

真人 ずっと心配だった。

太陽 電話すれば聞けるのに。

真人 電話はよくないと思った。

太陽 メールでもいいのに。

真人 かえって溝が深まるような気がして……

太陽 二丁目でも会わないね。もう、発散しなくてもよくなった？

真人 忙しくて。よく出てるの？

太陽 みつちゃんに「新しい男見つけるのよ」って、無理矢理連れてかれる。そのくせ、

あんな悪いこと言わないから、より戻しなさいなんて。

真人 それ、俺も言われた。

太陽 ひどいよね。

真人 で、どうなの？ 今は？

太陽 あ……、まだ一人だけど……。どうなるか、わかんない。

謙吾が顔を出して、入りずらそうにしている。

真人、気がついて。

真人 そうか。じゃ、がんばれ！

太陽 マサも！

真人 じゃ。(謙吾に)おじやましました。

真人、退場。

太陽 ごめん。落ち着かないね。外に行こうか？

謙吾 誰？

太陽 こないだまでつき合ってた相手。ここに住んだの。

謙吾 トイレの写真。

太陽 ああ、あれ。捨てようかと思ったんだけど、まあ、トイレだし、いいかなって。僕  
のうつりがすつごいいいから。



謙吾 何年一緒？

太陽 三年にちよい欠け。震災のすぐ後からだから。

問

謙吾 俺、何してたんだろうな。この頃、よく一人で歩いてるんだ。気がつくのと、ずっと一人で。なんていうか、このまんまいなくなれたらなんて。子供の頃、迷子になりたいと思って、わざとどこまでも歩いてたことあった。今も同じことしてる。迷子になりたい、いなくなりたい。ほんとにそう思う。いいな、太陽は。畜生、なんでこんななにぎやかなんだよ！

太陽 ああ、ごめんね。ゆつくり話せなくて。

謙吾 そういうことじゃない。

太陽 ごめんね。もう、だいじょぶだから、ね。

太陽、謙吾を抱くと、謙吾は抱きついてくる。

太陽 なに？

謙吾 ……。

太陽 大丈夫？ 大丈夫だから。ねえ、感染してる人たちのミーティングとか顔出してみたら。こないだ初めて行ったんだけど、すっごいよかったよ。ああ、一人じゃないんだって思えたよ、ほんとに。ほんとだって。

玄関のチャイム。謙吾は太陽にくっついたまま。

太陽 (大声で) 開いてるよ。

入ってきたのは、望月裕二。熊の着ぐるみを着ている。

裕二 おじやます。

太陽 何、何で来てるの？

裕二 そうじゃなくて、みっちゃんに誘われて。ちょっと早かったかな？

太陽 どういうこと？

謙吾 ……？

みっちゃんとうっちゃんが入ってくる。息が荒い。

充 「待つて」って言ったのに、聞こえなかった？

裕二 ええ。どうも、こんにちは。

充 下で見かけたから、やばいと思って、声かけたのに。  
仁美 エレベーターのドア閉まっちゃって。

充 駆け上がってきたわよ。5階まで。荷物抱えて。

仁美 おしかつたね。

太陽 みつちゃん、どういうことなの?!

充 プレゼントよ。新しい出会い。うつちゃんに紹介されてね。望月裕二くん! ちょうどいいわ、あんたにぴったり。これはびっくりさせてあげましょと思ってたら、何よ、あんたたちもう会ってるっていうじゃないの? それなら話をもっと簡単、運命の女神がニコニコほほえんでるってかんじよね。だから、再会をよろこびなさい。

裕二 やあ!

太陽 ちよつとやめてよ。

謙吾 じゃあ、帰るわ。

太陽 あ、ちよつと待って、ゆつくりしてってよ。

謙吾 いいって。それじゃ。

謙吾、出ていく。

太陽 謙ちゃん……!

充 まだいたのね、あの男。いいからほつときなさいよ。

太陽 そういうわけにはいかないって。

仁美 ちよつと見てこようか?

充 いいわよ。帰るって言ってるんだから、帰ってもらえばいいじゃない。

太陽 いいかげんにしてよ! やめてくれるかな、僕の世話焼くの。

充 何言ってるの? 今日はあんたの誕生日、イベントでしょ、イベント。

太陽 さつき、マサが来たよ、それもイベント?

充 あら、そうなの。やつぱり。だったら初めから来るって言えばいいのに。

太陽 もうほつといてよ。

充 私は、心配なのよ。あんたが一人でいるっていうのが。

太陽 そんなに心配なら、うつちゃんのこと面倒見てあげなよ。

充 この人は、いいのよ、一人でも大丈夫なタイプよ。

仁美 何それ?

太陽 とにかく、僕は今、一人でいたい。一人でいること楽しんでる。恋人はいらない。もうずっと一人でいってわかった。エッチもいいよ。一人でやればいいし。だから、いろいろ気を遣ってくれなくてもいいから。僕のこと心配してくれるのはありがたい、でも、僕ばっかり大事にされて、僕のまわりのみんなが悲しい目に会ってるのは、なんだか納得がいかない。わかってるんだよ、僕のせいなんだって、でも、だから余計に、こんなに楽しく毎日生きてていいのかわからない。

充 いいに決まってるでしょ。それじゃ、何、H I Vに感染したからって、毎日、どん

より沈んで暮らしてかなきゃいけないの？ そんなことないわよ。あんた贅沢よ。

私たちが少しでも病気のこと忘れさせてあげようと思つて、楽しくしてるのに。

太陽 僕は、忘れるわけにはいかない。ただできえ、自分のことじゃないみたいなんでも

ん。だから、これ以上、気をつかつてくれなくていい。僕は、一人でいいんだよ。

充 あんたね、今はまだいいけど、これからどんどん大変になつてくのよ。今のうちに

楽しんでおかなくてどうすんのよ。今のうちに、これからのこと考えておかなくて

どうすんのよ。わかつてるでしょ？

太陽 わかつてるよ。元気なうちにつてことでしょ。でも、これからのことなんて考えら

れない。今のことだつて、どうしていいかわからないのに。

充 だから……

太陽 もういいから帰つてよ、みんな。

充 帰れないわよ。ケーキだつて、ローストビーフだつてあるんだから。

太陽 持つてつていいよ。犬に食わせろ！

充 持つてけないわよ、あんなもの！

太陽 じゃあ、いいよ。僕が行くから。

充 何言つてんのよ。もう！ わかつたわよ。じゃ、撤収よ。ほんとにわがままなんだ

から。行きましょう。

充、出ていく。

仁美、太陽に包みを渡す。

仁美 これ、タイでH I Vに感染した人たちがつくつてるぬいぐるみ。誕生日おめでとう。

仁美、出ていく。

裕二が残る。

太陽 そういうことだから。

裕二 誕生日おめでとう。

太陽 ありがと。じゃあね。

裕二、出ていく。

太陽、携帯で電話をする。

太陽 (留守電に) 今日のパーティね、中止になったから。帰りに寄つても、誰もいないから。だから、来ないように。もし来たら……死ぬから。じゃあね。

太陽、仁美がくれた包みを開けてみる。中からクマのぬいぐるみが出てくる。

素朴な表情のテイディア。首にレッドリボンを巻いている。  
太陽、じっと見ている。

\* \* \* \* \*

十二月二十四日。

ひと気のない、どこかの雑居ビルのエレベーター前。

太陽がやってくる。

すぐ後から、裕二。

太陽、ボタンを押して、乗り込み、ドアを閉めようとする。

裕二が慌ててボタンを押してドアを開け、エレベーターに乗り込む。

裕二 セーフ！

太陽 ちよつともうやめてほしい。ストーカー。

裕二 そんなじゃない。

太陽 じゃあ、何でこんなところまで？

裕二 あ……どこ行くのかなと思って。すっごい興味あって。だって、いつまでも歩いてるし。2時間近く。

太陽 歩くの好きなの。下りてよ。

裕二 いやだ。

太陽 じゃ、いいよ。

太陽、「R」のボタンを押す。動き出すエレベーター。

裕二 屋上？ 屋上に何が？

太陽 知らない。行き当たりばったり。電車に乗って、降りたことのない駅で降りて、よくわかんない商店街を抜けて、知らないビルに上ってみんの。

裕二 それ、ストーカーより変じゃない？

太陽 今日クリスマスだから、きつときれいだよ。東京タワーもスカイツリーも。

ガタンと音がして、エレベーターが止まる。ドアは開かない。

太陽 あれ？

裕二 止まった？

太陽 うん。

しーんとしている。

太陽、ボタンをいろいろ押してみる。

裕二 そのうち動くよ。

間

太陽 動かないじゃん！

裕二 もう少し待ちなつて。

太陽 (ボタンを見て) 「非常の際に押してください。係の者に連絡します」。押すね。

裕二 え？

太陽 だって、非常の際でしょ、今。間違いなく。

裕二 ああ、どうぞ。

太陽、非常ボタンを押す。

反応なし。

太陽 これって、ノーリアクションなわけ？

裕二 連絡が行ってるんじゃないの？

太陽 管理人？ そんなのいなかった。

裕二 じゃあ、管理会社。

太陽 おーい！！ おーい！！

裕二 呼んでも無駄だと思うよ。

太陽 何で落ち着いてるわけ？

裕二 ま、ゆつくり待とうよ。

太陽 おーい！！ おーい！！ おーい！！

太陽、座り込む。

太陽 途中から、気がついてたんだよ。だから、どこまでついてくるかなつて。バチがあつた。

裕二 そんなことないつて。僕、楽しいよ。

太陽 ……。

裕二 ごめん。

太陽 なんで後つけてくるわけ？

裕二 心配だから。

太陽 いいよ、心配してくれなくて。

裕二 じゃあ、好きだから。

太陽 いいよ、好きになつてくれなくて。

裕二 つきあつてほしい。わ、言っちゃった。

太陽 どうしてこういうシチュエーションでそういうこと言えるわけ？

裕二 なんていうか、タイミング。どうかな？

太陽 いやだ。

裕二 そこをなんとか。

太陽 バカじゃないの。

裕二 他に誰かいるの？

太陽 いないよ。

裕二 じゃあ……

太陽 悪いけど、今、誰ともつきあいたくない気分なんだ。

裕二 病気のせい？ HIVポジティブだから、もう誰ともつきあえないって。

太陽 そんなこと思つてない。

裕二 でも、この頃ずっと一人じゃない。誰とも会わないし。

太陽 そんなことない。

裕二 仕事もやめたね。

太陽 今、新しいの探してるところだつて。

裕二 よくないよ。

太陽 決めつけないでくれるかな？

裕二 一人がいやなら、いやだつて言えばいいのに。坂井さんに連絡取りたいならとればいいのに。

太陽 やめてよ。

間

裕二 余計なお世話かもしれないけど……ハッテン場行くのやめた方がいいと思う。

太陽 ……

裕二 別に、ポジティブだからハッテン場行っちゃいけないなんていうつもりはなくて……、だつて、セイフセックスすればいいわけだから。でも……

太陽 ついてきてたんだ。中まですつと？

裕二 どうしようかと思つたんだけど、それはやめて、外で待つてた。

太陽 ……僕、ハッテン場で感染したんだと思うんだよね。何人か心当たりがあつて、その人たちに会えないかなと思つてき。だつて、もし気がついてないなら、教えてあげたいじゃない。まだ、セイフセックスしてないんだつたら、よくないよつて言つてあげたいじゃない。そう思つてき。中に入つても何もしない。手を出されてもうまく逃げて。何もしないで出てきてる。

裕二 そうだつたんだ。そうだよね。

太陽 でも、ちよつと嘘かも。

裕二 ……。

太陽 初めはそうだったんだけど。なんだかもよくわかんない。その人たちに会いたいかどうか。ポジティブだつてわかってから、決めたんだよね、ハッテン場になんか二度と行かないつて。でもき、なんだか行っちゃうんだよね。ふらふらつと。一日中歩いてるついでみたいに。よくわかんないや。

裕二 会えたの、探してる人には？

太陽 ううん。普通行かないよね。感染してることがわかったらさ。

裕二 そうでもないんじゃない、だつて、行つてるわけだし。

太陽 何もしないで見てるとき、それもなんだかすつごい変なんだけど、結構、コンドーム使つてない人いてき。もちろん、ほとんどの人は使つてるんだよ。でも、まだ、いるんだなあと思つて。バカじゃんとか思つて。置いてあつたコンドームつかんで、投げてやつたら、投げ返された。腹立つたから、そこにあつた全部そいつらに投げて、出てきた。畜生、いいかげんに動けよ！ おーい、おーい！！ おーい！！

返事はない。

間

太陽 みつちゃんと言つてた。一人暮らしで死んじゃつたらどうすんのつて？ なんだか、今、すつごいわかつた気がする。

裕二 それ違うよ。一人じゃないから。とりあえず。

太陽 ……。

裕二 だいじょぶだつて。

太陽 だつて、さつきから何分も経つのに、連絡ないつてどうよ。（パネルを指して）これ電話でしょ？

裕二 でも、明日の朝になれば、きつと誰かが来るし。

太陽 いやだよ、朝までこんなとこにいるの。

裕二 しょうがないつて、もうこうなつたら持久戦。体力消耗しないように。大人しく待つ。

間

太陽 ちよつとお願いがあるんだけど。

裕二 何？

太陽 ちよつと胸を貸してほしいんだけど。

裕二 は？

太陽 別にそれから、どうこうつていうんじゃないやなくて、貸してほしい。

裕二 どうして？

太陽 寒くて。ていうか、ちよつと泣きたい気分になった。

裕二 え？

太陽 ずっと泣かないって決めてただけど、今、泣いてみるのもいいような気がしてきた。もうどうしようもないし、泣いちゃおうかなってかんじ。シヨックで泣きそうなきあつたんだけど、何だか泣けなくて。そのうちにマサにも謙ちゃんにも泣かれて。タイミンク外したっていうか……。そんなことできる相手誰もいなくて。

裕二 じゃあ、どうぞ。こんなんでよかったら。

太陽 やっぱりやめる。いい年してみつともない。

裕二 そんな二人しかいないし。

太陽 大声でワンワン泣くかもしれないよ。

裕二 だいじよぶ。

太陽 むちゃくちゃになって、殴ったりするかもしれないよ。

裕二 だいじよぶ、クリスマスだと思っと思って我慢する。

太陽 そう、じゃあ……。

裕二 どうぞ。

太陽、裕二の胸に顔を埋める。

そして黙っている。

裕二、とまどいながら、太陽のカラダをそっと抱く。

長い間

太陽、裕二から離れて、背を向けている。

裕二 もういいの？

太陽 いいよ。感謝。

裕二 また必要になったら言っ

太陽 うん。

エレベーターが動き出す。

太陽 あ、動いてる。

裕二 ほんとだ。

太陽 助かった。

裕二 今、動かなくてもいいじゃん！

エレベーターが止まる。

扉が開く。

太陽 屋上だ。

裕二 このまんま一階に……



太陽 ちよつと出てみよう。せつかくだから。  
裕二 あ、待って。

太陽、外に出ていってしまふ。  
後を追う、裕二。

太陽 すごいなあ。

裕二 あつちが新宿だ。

太陽 みんなクリスマスしてるんだ。

二人、黙って、景色を見ている。  
見事な夜景と星空。  
長い間

太陽 じゃあ、行こう。

裕二 どこに？

太陽 決まってるじゃない。うちに。行くよ。

太陽、歩き出す。

裕二 なんでもそつち？

太陽 エレベーターは危ないから、階段。

太陽、退場する。

裕二、太陽の後を追って退場。

\* \* \* \*

同じ日の夜。太陽の部屋。

充と敦子。

敦子 あら、ブリーダーなの？ 犬種は何？ チワワとか？

充 トイ・プードルなんです。初めは趣味で飼ってたんですけど、そのうちにこれって仕事になるかと思っはじめてたら、ブームに乗っちゃって。

敦子 そうね、一時期はやったわね。

充 まあ、最近はチワワに押されてるっていうか、ブームもとつくに終わったかんじな

んですけど。

敦子 じゃあ、おうちにはいつぱいいるの？ プードルが？

充 ええ。

敦子 大変ねえ。

充 でも、それほどじゃ。プードルってほんとに鳴かないんですよ。それに毛も抜けないし。だから、思ってたほど大変じゃなくて。今は、子犬がみんな引き取られてつたところで親犬しかいないんですけど、生まれたばかりの頃は、そりゃ、にぎやかで。ほんとにぬいぐるみみたいで。

敦子 いいわねえ。私も一匹けてもらおうかしら？

充 よろこんで！ ちょうど今一匹いるんですよ。今年生まれた子が。

敦子 あら、みんないなくなっただんじやないの？

充 それが、出戻ってきて。半年でどんどん大きくなっちゃって。たまにいます、そういう子。で、規格外ってことで、戻ってきちゃって。あ、でも、ちよつと大きいだけで、他は何ともないんですよ。

敦子 まあ、かわいそう。犬に罪はないのにね。

充 でも、ほんとにかわいいんですよ。小型犬って、大きくなっても子犬みたいだから。その子もやっぱりかわいくて。

敦子 私、今、塾の教師してるのね。小学生の中学受験見てるんだけど。やっぱり、小学生くらいまでね、かわいいなって思えるのは。中学、高校っていくとね、どんどん大人になっちゃって。ま、もちろん別の可愛さがあるんだけど。同じくらいにくらいしいところも出てくるからね。

充 何、教えてるんですか？

敦子 国語と英語。前は中学校の国語の教師やってたんだけど教えてたんだけどね。今はまあ、何でも。近所の小さな塾だもの。親御さんともみんな知り合いみたいなかんでね。

充 今日はお休みなんですか？

敦子 受験生に休みはないっていうんだけど、クリスマスくらい休みなさいって、私は思うのよ。まあ、私が休みたかっただけなんだけど。

仁美がお茶を持って登場。

仁美 どうぞ。

敦子 ありがとう。（お茶を見て）あら、ルイボスティー。やだ、まだあるの？

充 この人が妙に気に入っちゃったらしくて。

仁美 これ飲み始めてから、すっごい調子がよくなって。

敦子 ほんとに？ じゃあ、私ももう一度チャレンジしてみようかしら？ それにしても、太陽、どこ行っちゃってるのかしら？ ねえ、みんなこうして集まっているのに。

充 今日、私たちが来てることは知らないんです。どうしてるかなと思って来てみたら、

お母さんいらしたんで……

敦子 やめて、お母さんなんて言うの。もう母親も卒業よ、この年になると。だからね、もう名前で呼んでもらおうと思つて、太陽たちには。

充 敦子さん？

敦子 あ、知つててくれた？

充 ええ、お話はいろいろ……

敦子 そうよね、お母さんつて呼ばないで頂戴つて言つてから、私たち、ちゃんと話ができるようになったんじゃないかと思うのよ。上の息子はね、結婚して子供がいるんだけど。生まれたとたんに、おばあちゃんよ。ひどくない？

仁美 そうですね。

充 そんなふうには全然見えません。

敦子 孫がいるときには、いいのよ。三人称として。でもね、いつのまにか、二人称になつてゐるわけ。息子と二人で話してるときとかもね。「おばあちゃん、それ取つて」みたいな。いつのまにかよ。これつて、ここで文句言つとかないと、これからずつと「おばあちゃん」つて呼ばれるんだわと思つて、ちゃんと聞いたのね。でも、孫の手前、それは微妙だつていうわけ。自分たちは「お母さん」に戻つたとしても、孫にとつてはおばあちゃんなんだからつて。だから、「敦子さん」とか「あつちやん」とか呼んでつて言つてゐるのよ。気持ちが悪いつていうのよ。そんなことないわよねえ？

仁美 ええ。

充 全然。

敦子 太陽はね、あんまり抵抗ないみたいで、すんなり受け入れてくれて。まあね、だからつてわけじゃないんだけど、ついつい、こつちに来ちゃうのよ。

充 ほんとに仲良しですよ。私なんて、一年に一度帰るかどうかってかんじかな。

仁美 私は、もう全然。

敦子 あら、そう。

仁美 だから、なんだかうらやましいですよ。そうやって、大人になつてから、仲良くできてるのつて。

敦子 仲良くもないんだけどね。でも、やっぱ「告知」されてからよね。ああ、あの話を聞いてからだわ、太陽とちゃんと話すようになったの。

充 告知？

敦子 そうよ。初めはもうびっくりして。どうして、この子だけそんな目にあうのかつて。もういつそ死んじゃつた方がいいんじゃないかと思つたくらい。

仁美 そんな……

敦子 でもね、わかつたのよ。それは一つの個性なんじゃないか。いろいろな子がいるもの。太陽だつて、元気に生きていこうとしてる。それを、私が支えないでどうするのつて。今じゃ思つてるのよ。

仁美 なんだか、すごいな。

充 でも、病気は個性とはいえないんじゃないかしら？

敦子 何言ってるの。だめよ、病気だなんて言っちゃ。もつと前向きに、自信を持たなきゃ。

仁美 たしかにそうですね。

敦子 私もね、この間、手術して、いろいろ考えたの。もうそんなに長くはないんだなって。

充 そんな……。

敦子 そりゃ、まあ、今は元気だし、孫がいるようには見えないわよね。でも、あとどれだけ生きられるのかってことを考えるようになったの。太陽ともね、そんな話、いろいろしたわ。あんまり、話しながらないんだけど。

充 でも、立派だと思います。現実から逃げないっていうか。

仁美 そうそう。

敦子 逃れられない現実ってあるものよね。私もほんとに思ったわ、太陽から聞いたときは。でも、あの子どもがんばってる。私もがんばらないとねって。

充 がんば！

敦子 あなたたちは、親御さんにはもう「告知」したの？

充 いえ、私たちはそうじゃないんです。

敦子 あら、そうだったの。ごめんさい。私、太陽のお友達だから、みんなそうなんだとばかり思ってた。

充 そういう友達もたくさんいるんだと思いますけど、同じ病気の。でも、私たちはそうじゃないんです。

敦子 だから、だめだって言ってるじゃない。病気って言っちゃ。自分がそうじゃないからって、病気って決めつけるのはよくないわ。

充 でも、病気だし。

敦子 あなた頑固ね。

充 病気です。だって、今は、まだ元気だけど、病院には行ってるわけだし。

敦子 病院？ そうなの？ 何、治そうとしてるの、太陽は？

充 治るものなら誰だって、治したいと思うに決まってるじゃないですか。太陽は、まだ、症状が出てないし、でも、定期的に病院には行ってるんですよ。ご存じないんですか？

敦子 それは、初めて聞いたわ。父親がね、あの子に告知された後、連れて行くとしたの。でも、太陽は病気じゃないって言いつて、絶対に行こうとしなかった。あ、そうなの。病院に行ってるの。やっぱり、坂井くんと別れたことが大きいのかしら？

充 それは関係ないと思いますけど。

仁美 あの、太陽のお父さんって、もう何年も前に亡くなってるんですよね。

敦子 ええ。四年前に。

仁美 告知って何の告知ですか？

敦子 決まってるじゃない、僕はゲイなんだよって。告知。  
充・仁美 え？

玄関のドアの音。

太陽が帰ってくる。裕一も一緒。

太陽 ただいま。あれ、どうしたのみんな？ ていうか、やだな、いない間に勝手に入って。

充 二人でのぞきにきたら、お母さん、じゃないや、敦子さんがいて……それで……

太陽 (敦子に) 今日は何なの？

敦子 病院で仲良くなったお友達とお昼食べた帰りに寄ったの。あんたにちよつと話があって。

太陽 何よ、話って。

敦子 それよりも、あんた病院行ってるんだって？

太陽 え？

敦子 聞いたわよ、この人達から。どうして黙ってたの。

太陽 ……ごめんね、ちゃんと話さなきゃと思ってたんだけど。なんだそうだったんだ。

充 あのね、太陽、私たち……

太陽 いいよ。別に怒るつもりないから。僕も、今度会ったら、話そうと思ってたんだ。

仁美 だから、そういうことじゃなくて……

太陽 (敦子に) ま、そういうわけで、僕はHIVに感染しちゃいました。ずっと黙っててごめんね。

間

敦子 え？ 何、HIVって？

太陽 ヒト免疫不全ウイルス。知らないの？

敦子 それは知ってるけど、それがどうしたの？

太陽 だから、僕がそうなの。ていうか、まだHIVウイルスに感染しただけ。抗体検査の結果がポジティブだったってだけなんだ。まだ、何のエイズの症状も出てないから。

敦子 エイズって何？

太陽 だから、後天性免疫不全症候群。って、なんて言ったらいいかな。

敦子 ちよつと待って、あんた、ゲイを治そうとして病院に行ってるんじゃないの？

太陽 何言ってるの？ そんなことするわけじゃない。

敦子 でも、今、この人たちが……

太陽 え？

充 「告知」なんて言うから、てつきりあんたがもう話したんだと思ってる。

仁美 カミングアウトと勘違いして……

太陽 え？ どういうことよ、それ？

敦子 それは、私が聞きたいわよ。どういうことなの？ エイズって、どういうことなのよ？

太陽 あ……だから、今、言ったまんまなんだけど。

敦子 あんたって子はどうしていつもそうなの。そんなにさらつと。人ごとみたいに。エイズって大変な病気でしょ、死ぬかもしれない。

太陽 まあ、そうだけど。でも、元気だから。

敦子 太陽！！

太陽 だいじょぶなんだって。

敦子 だいじょぶじゃないでしょ、何言ってるのよ！

敦子、太陽につかみかかる。

みんなが止める。

太陽 母さんだって、こないださらつと言ったじゃない。だから、僕もそうしたんだよ。

敦子 だからじゃないでしょ。

仁美 落ち着いてください。

充 そうよ、座って、話し合いましょう。

太陽 そうだよ、落ち着いて。

敦子 落ち着いてなんていられるわけじゃないでしょ。（太陽に）いつからなの？

太陽 いつからって、わかったのは今年の六月。

敦子 半年も黙ってたの。あんなにしょっちゅう会ってるのに。どうしてよ。

太陽 だから、心配させたくなくて。

敦子 この人たちは知ってたんでしょ。何で、私にだけは黙ってるのよ。

太陽 だから、今、話したじゃない。こういうふうになるのがいやだったんだよ。

敦子 待って。どうして、そんな病気に？ だって、それって、売春とかそういうふうなあれで……。だって、あんなには、坂井くんがいたじゃないの。何、もしかして、坂井くんもそうなの？ 二人ともなの？

太陽 マサは違うよ。僕だけ。

敦子 じゃあ、どうして……？

太陽 マサとつきあい始める前にいろいろあったから。そのときに感染しちゃったんだと思う。

敦子 あんたって子は、もう……

太陽 でも、だいじょぶだから。まだ全然平気だし。ほら、こんなにぴんぴんしてる。治療法がない病気にかかって、だいじょぶなわけじゃないでしょ。

太陽 まあ、そうなんだけど。

短い間

仁美 あのと、たしかにエイズの治療法はまだ発見されてないんです。でも、治療法の開発はどんどん進んでるし、発症を防ぐための新しいクスリもどんどんできてるんです。私、もう何年もエイズのサポートグループのボランティアスタッフしてるんですけど、ほんとにすごい変わってきてるんですよ。

裕二 まあ、動揺するのはわかるけど、結局はただの病気なんだから。そんなにあたふたしてもしようがないと思うんだけどなあ。

敦子 ただの病気じゃありません。

充 この間、手術したって、それと同じじゃないですか？ ほら、病気を抱えて生きるっていうか……。

太陽 そうだよ。

敦子 何を言ってるの、全然違うでしょう。エイズっていうのはもつとなんていうか、難病なんでしょう？ 助からない病気なんでしょう？

仁美 まあ、そうなんですけど、これからどうなるかはわかりません。少なくとも、何年前とは全然違っていいことはたしかなんです。

敦子 太陽、あんた帰ってきなさい。今日は、それを言いに来たの。うちに帰ってこないかって。この部屋、やっぱり処分することにしたから。

太陽 そんな急に。

敦子 いつか売れるまでは、使ってもかまわないって話だったでしょ。でも、ちゃんと家賃だって……

敦子 何言ってるの？ いいかげんな仕事しかしてないくせに。それに、病気なんだから。一人でこんなところに置いておくわけにはいかないから。

太陽 ダイジョブだよ。一人でちゃんとやってるって。ちゃんとしてないから、そんな病気になったんじゃないの！？とにかく、帰ってきなさい。くわしい話はそれから。引越しの準備をしておくこと。管理会社には、話しておくから。

太陽 いやだよ、僕は帰らないから。

敦子 何言ってるの、あんたは病気なんじゃないの？

太陽 病気だけど、でも、まだ全然元気だし。

敦子 今のうちはね。

太陽 だから、もう少しここにいさせてほしい。前だつてわかつてくれたじゃない。僕がゲイだつてカミングアウトしたとき、今度だつて同じだよ。

敦子 全然、違うでしょ。ゲイだから、男が好きだからって命にかかわることはないですよ。それに、あんたは自分がゲイだつてことは胸を張って言えることだつて言った。ゲイだつてことはあんたの誇りだつて言った、でも、HIVに感染しているってことは、あんたの誇りなの。胸を張って言えることなの？

太陽 胸は張れないかもしれないけど、でも、胸を張ってもいいんじゃないかと思いた

い！  
敦子 ばかなこと言ってるんじゃないの！  
太陽 だいじょぶだよ、お母さんよりは長生きするから……  
敦子 太陽！

玄関のチャイムが鳴る。

太陽 開いてるよ！

真人と謙吾がやってくる。

敦子 坂井くん！

充 やだ、どうしたの二人揃って。

謙吾 入ろうかどうしようか迷ってたら一緒になっちゃって。

真人 で、二人で。

敦子 ねえ、坂井くん、今、聞いたんだけど、太陽の病気のこと。

真人 あ……（太陽に）話したんだ。

太陽 うん。

敦子 ……知ってたの。知ってて黙ってたのね。ひどいじゃないの！

真人 ごめんなさい。太陽が直接話した方がいいと思って。

敦子 ねえ、坂井くん、あなたが太陽と別れたのって病気のせいなの？

真人 ……。

敦子 どうなの？

真人 ……そうです。

敦子 見捨てたのね、太陽を。

真人 そういうわけじゃ……

充 そうですよ、太陽は、こんなに元気なんだし。

敦子 でも、死ぬんでしょ、エイズって病気はそうなんですよ？

太陽 ……

謙吾 エイズは死ねない病気なんですよ。今じゃ、治療法や発症を抑える薬がたくさんできて、発病してからだって、生活に気をつけて暮らしてれば、死ぬなんてことなかなかないんです。一生、この病気とつきあっていかなきゃいけない。糖尿病なんかと一緒にいます。僕だって、普通に仕事続けてます。太陽は、まだ発症してないし、だから、そんな死ぬなんて……。

敦子 待って、あなたもそうなの？ そういうことなの？

謙吾 ……ええ、そうです。

敦子 じゃあ……

太陽 違うよ、僕と謙ちゃんは、そういう意味では関係ない。別れてからずっと会ってな



裕二 かった。でも今は友達だよ。同じ病気を抱えてる。僕たち、この病気のおかげでまた会えた。だから、神様に感謝してもいいくらい。ほんとそう思ってるんだ。そうだよ。

玄関の方から「ワン」と犬の鳴き声。みんなびっくり。

充 (大声で) やだ、犬？ どこにいるの？

真人が、玄関から、犬の入ったケージを持ってくる。

太陽 ほんとに？ 生きてるの？

裕二 ていうか、鳴いてるし。

充 やだ、そうなの。ちよつと、あんた、平気なの？ あんなにいやがってたのに。

太陽 もう、怖くないの？

真人 怖くはないけど。だいじょうぶ。たぶん。

太陽 これって？

真人 トイ・プードル。

充 あんた、なんでアタシのここ来ないのよ？

太陽 何、くれるの？ 僕に？ ここで飼えって？

真人 そうじゃなくて、二人で一緒に……

太陽 ……やだな、何言ってるの？

真人 ていうか、俺 とこいつと一緒にここで？ あ、なんだったら、こいつだけ置いていく。

充 それじゃ意味無いじゃないの！

真人 あ、そうか。

太陽 何歳？

真人 もうじき6ヶ月だって。

充 (見てみて) それにしては大きいわね。

真人 大きくなりすぎて、売れ残ったんだって。ていうか、出戻り。俺と同じ。

太陽 ……。

太陽、ケージを取り上げてのぞいてみる。

みんなも一緒に。

敦子、だまって玄関に向かう。

太陽 あ、ねえ……

敦子、出ていってしまおう。

謙吾 どうしたんだろう？

裕二 言うだけ言ってすつきりしたんじゃないの？

充 そういう問題か？ 問題か？

仁美 ねえ、太陽、実家に帰るっていう選択肢は、それはそれでありなんじゃないかと思うよ。

充 それより、あんた、この犬どうすんのよ？

太陽 ……。

真人 あ、いいや。やっぱり、持って帰るわ。

太陽 待って……。

間

充 迷ってるんなら、もらっとけば。見たところ、ちゃんとした子みたいだし。

仁美 まあ、プロの目はたしかだよな？

謙吾 俺も一匹ほしいなあ。

充 いいわよ、うちの子世話してあげる。太陽、あんた、どうすんの？

太陽 ……犬は置いてって。

真人 じゃあ。

真人、退場。

犬を見ている子供たち。

\*

\*

\*

\*

\*

太陽の部屋。

十二月三十一日の夜遅く。

紅白歌合戦が終わって「行く年来る年」が始まる頃。

充、仁美、裕二、謙吾が座って、正面にあるテレビを見ている。

TVから鐘の音が聞こえる。

スイッチを消す充。

謙吾 何で消すのよ？

充 嫌いなものよ、「ゆく年、来る年」。この鐘の音、なんだか気が滅入るっていうか、なんていうか。毎年同じって、どうかと思うわ。

裕二 あの鐘の音聞くと、今年も終わりなんだなって気がしみじみするの。

充 ていうか、何だか心がざわざわするのよね。

仁美 煩惱が一つずつ消えてつる証拠なんじゃないの？

充 うるさい。はい、紅白が終わって、今年も終わり。さ、初詣に行きましよう！

仁美 今年はどこにするの？ 浅草寺、日枝神社？

謙吾 ていうか、近所でいいんじゃないの？ 適当で。

裕二 花園神社の初詣って、イケメンが白酒売ってるらしいよ。

謙吾 じゃあ、そこに決まり。行こう。

裕二 うん。

充 (奥に向かって) 太陽、行くわよ。

太陽 (顔を出して) ごめん、ちよつと先行つててくれる。

充 何してんのよ？

太陽 年賀状、もう一息なの。

充 いいじゃないよ、そんなのほつといて。

太陽 今年中に書きたいんだって。

謙吾 往生際悪すぎ。

太陽 いいから、先行つてて。

充 わかったわよ。じゃ……

みんなが行きかけると、敦子が登場。

充 あ、どうも。

敦子 こんばんは。

太陽 やだな、何よ、こんなに遅く。

敦子 あれから、全然連絡ないし。

太陽 ……そつちから、何かあるかなと思つてたから。

間

仁美 じゃあ、先に行つてるね。(敦子に) どうぞ、よいお年を。

充・謙吾・裕二 よいお年を！

敦子 ……。

裕二 じゃ！

みんな元気に出ていく。

敦子 初詣？

太陽 うん。

敦子 あんたはいいの？

太陽 うん、後から行く。

太陽、年賀状を持って、座る。  
やがて、年賀状を書きはじめる。

敦子 年賀状なんて書いてるんだ？

太陽 まあね。

敦子 うちに来ないのはどうして？

太陽 いいじゃん、どうせ会うんだから。

敦子 いつ帰ってくるの？

間

太陽 その話なんだけど、僕、やっぱり、ここに……

敦子 お正月よ、お正月。泊まっていけるんでしょ？

太陽 うん、まあね。

敦子 こないだ話した、ここ売って、あんたが帰ってくる話……

太陽 だから、その話なんだけど……

敦子 なに？

太陽 僕、ここにいたいんだ。マサと一緒に。それから犬と。病気はだいじょうぶ。ほんとうに。今のところはだけど。犬も平気だった。だから……

敦子 だから……

太陽 今までどおりに。

敦子 だいじょうぶなの？ できるの、今までどおりに？

太陽 わかんない、でも、きつとできると思う。仕事もちゃんとしたのを見つけようと思つて。これからずつとの仕事。だから……

敦子 だから……

太陽 今までどおりに。

敦子 じゃ、そうしなさい。

太陽 いいの？

敦子 どうぞ。

太陽 やった！

敦子 やっぱりやめたの。

太陽 え？

敦子 全然、売れそうもないんだもん、むちゃくちゃ安くしないと。話してるうちに腹がたつてきて。だから、やめたわ。

太陽 そうなんだ。

敦子 だから、あんたここにいればいいわ。ずっと。

太陽 うん。

太陽、また年賀状を書き始める。

敦子 なーんてね。

太陽 (手を止めて) 何、嘘なの？

敦子 ちよつとね。

太陽 どういうことよ。

敦子 こないだ、あんなに帰ってこい！って言ったけど、ほんとにあんた帰ってきたらどうするのかなくて、考えちゃって。

太陽 ……。

敦子 今は元気だけど、そのうちにいつか、そうじゃなくなったら、私どうするんだろうって。

太陽 どうするって？

敦子 私が教えてる子供達の中に、一人、とっても女の子みたいな子がいるのね。みんなにいじめられて。昔のあなたにそっくり。みんな、オカマとかホモとかかって言ってる。気持ち悪いって。私ね、授業が終わった後、一人で残って泣いてたその子に、「だいじょぶよ、先生んとこの下の息子も、きみと同じ。小さな頃はいじめられてたけど、今じゃ、すっかり強くなって、そりゃ元気にやってんのよ。だから、きみも元気だそうね！」って、言ってあげられなかったのよね。

太陽 ……。

敦子 別にあんたの病気がどうこうじゃなくてね。そのことに気がついたとき、思ったのよ、私、どうするんだろうって。

太陽 どうもしなくていいって。

敦子 どうもしなくていいって言われて、何もできない人間が、何、エラそうに言ってたんだらうなって、思ったのよ。

太陽 ……。

敦子 だから、帰ってこないで……。そう、言いに来たんだわ。

間

太陽 わかった。じゃあ、帰らないよ。

敦子、太陽の書いている年賀状を見に立つが、太陽と目があって、ソファに腰を下ろす。

敦子 私、やっぱり親だったんだなあって思った。

太陽 え？

敦子 友達のもりで一緒になって遊んでいたいなんて思ってたけど、やっぱり親だったんだなあつて。びつくりしちゃったわよ。それが、発見だったかな。あんたのおかげで。

太陽 ……。

敦子 (立ち上がり) じゃ、行くわ。お正月、三日は康たちが来るから、会いたくないなら別の日にしてね。

太陽 うん。

敦子 じゃあね。マサくんによろしく。

敦子、出ていく。

太陽 ねえ、ここに来れば？

敦子 (立ち止まって) え？

太陽 ここに来れば？

敦子 そんなこと言うと、ほんとに引越して来ちゃうわよ。

太陽 僕もマサもみんなもいるよ。だって、うちに帰っても一人なんじゃないの？ ねえ、そうなんだよね。そうだったんだよね？

間

敦子 何言ってるのよ、勝手に決めないでくれる。生徒たちがいるんだから、毎年毎年次

から次へと。さびしいなんて思ってるヒマないわよ。

太陽 ちよつと言ってみただけだって。

敦子 そうだと思った。邪魔はしないわよ。

太陽 邪魔じゃないって。

敦子 ……。

太陽 ねえ、母さん。

敦子 なに？

太陽 生きててよかったって思った。生きててよかったって思ったことなかったんだって思った。ありがとうね、生んでくれて。

敦子 ……。

太陽 大事に生きるから。だから、これからもよろしく。

太陽、年賀状を一枚、差し出す。

受け取る敦子。

敦子 来年は未年か？ (壁の時計を見る) やだ、もう今年だわ。

真人が入ってくる。

敦子 明けましておめでとう。じゃあね！

太陽 一緒に行かない、初詣？

敦子 行かない。一人でぶらぶら帰ってみる！

敦子、出ていった。

真人 何の話？

太陽 ここ売るのがやめたんだって。

真人 そう、よかった。

太陽 うん。

真人 みんな先に行ってるって。

太陽 じゃあ、行くか！

太陽、出ていこうとする。

真人 やっぱり虫が良すぎるよね。帰ってくるなんて。

太陽 いいからいれば。

真人 いいの？

太陽 犬もいるし。

真人 うん。

太陽 でも、一つだけ、覚えておいてほしいんだけど……

真人 何？

太陽 僕は、いつか死ぬと思うんだ。

真人 なんだよ？ そんなことないって。ちゃんと気をつけてれば大丈夫だって。

太陽 でも、いつかは、きつと。きつとじゃないや、絶対に。

真人 おい……

太陽 それでもいいなら、戻ってきていい。

真人 そんなこと言うなら、俺だって。

太陽 俺だって何？

真人 死んでやる。

太陽 なんだそれ？

真人 死ぬのが怖くて、生きていけるか！

太陽 わけわかんないよ。ていうか、こわいじゃん。

真人 え？

太陽 こわいじゃん、すっごい。でも、今は生きてみる。

真人 うん。

間

太陽 (窓の外を見て) なんで正月って空がきれいなんだろうね？

真人 みんな仕事してないからだろ。

太陽 空も星もなんだかすごいね。

真人 うん。

太陽 来年もまた見られるかな？

真人 もちろん。

太陽 再来年は？

真人 決まってる。

太陽 十年先は？

真人 きつと。

太陽 百年先は、千年先はどうなんだろう？

真人 何言ってるの？

太陽 どんな人が見てるんだろうね？

真人 もう、人なんていないんじゃないの？

太陽 ううん、きつといるよ。でも、その人達は、僕らがここでこうやって星を眺めてたことなんて知らない。エイズは、もう恐ろしい病気じゃなくなつて、「昔は大変だったんだってねえ」なんて言つて笑つてる。

真人 その時にはね。

太陽 一緒に笑うか？

真人 ああ！

太陽 じゃあ、行こう。みんな待つてるし。

二人、出ていく。

出がけに電気を消していく。

真っ暗な部屋の向うに、きらきら光る星空が広がっている。

幕

\*

\*

\*

\*

\*



ご挨拶（当日パンフレットより）

2014年版の改訂にあたって一番気をつけたのは、「エイズ」という言葉の使い方です。初演時2003年でも、まずHIVウイルスに感染、それからエイズを発症という理屈はわかっていたのですが、それでも「HIV」より「エイズ」という言葉の方が、わかりやすく伝わりやすいだろうと、当時の台本には「エイズ」という言葉がたくさん登場しています。

今回、劇中の「エイズ」という単語の多くを「HIV」に変えました。それが、2003年からの11年の変化の一つなのだろうと。現在、HIV、そしてエイズについての知識は、ずいぶん浸透してきたようにみえます。ウイルスに感染したら、すぐ死につながる病ということではなく、ウイルスを持ちながら生き続けていく病気なのだということも（もちろん、例外はありますが）。

ですが、2014年の日本では、その認識がよくない方向に働いているのかもしれない。昨年度のエイズ発症者数が過去最多、ゲイシーンでも、80年代のエイズパニックを経験していない若い世代では、この病気に対する危機感が少なくなっていると聞きます。また、全国各地にあるHIVの活動拠点（サポートセンター）への国からの助成が今年度で打ち切られることにもなっています。

表立ってはなかなか見えてこないHIVの問題が、ますます見えにくくなっていく。そして見えない＝ないことになっていってしまうことが心配でなりません。それはHIVの問題だけではなく、ゲイを初めとするセクシュアルマイノリティの問題にもそのままつながっています。

HIV、エイズについての演劇映像作品には「どう死ぬのか」を描いたものが多くて、それがやりきれなくて書いたのがこの作品でした。「どう死ぬのか」ではなく「どう生きるのか」。それを描くことが、ゲイの劇団として作品をつくり続けている、僕たちの仕事なのだろうと思っています。

本日はご来場ありがとうございます。最後までどうぞごゆっくりご覧ください。

関根信一

劇団フライングステージ第三十九回公演  
「PRESENTプレゼント」

2014年7月16日(水)～21日(月・祝)

下北沢 OFF・OFFシアター

作・演出 関根信一

出演 林田太陽 …… 澤口 渉

坂井真人 …… 阪上善樹

久保田充 …… 石関 準

林田敦子 …… 関根信一

望月裕二 …… 小浜 洋

内田仁美 …… 木村佐都美

泉 謙吾 …… 岸本啓孝

照明 伊藤 馨

音響 横佩 彩

樋口亜弓

舞台監督 川田 崇

水月アキラ

フライヤーイラスト ぢるぢる

フライヤーデザイン 石原燃

制作 渡辺智也

三枝 黎

協力 笹原千寿

おちないリンゴ

ロデオ★座★へヴン

M・M・P

CoRich 舞台芸術!

企画製作 劇団フライングステージ